
セルフ・ライト・イデオロギー

魔人転生記

葵 大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルフ・ライト・イデオロギー

魔人転生記

【Nコード】

N2571Z

【作者名】

葵 大和

【あらすじ】

始まりは唐突に。何の脈絡もなく導かれた異世界で、青年は連続死亡記録を大幅に更新した。剣で斬りつけられ、光線で打ち抜かれ、拳に貫かれ。ようやく理不尽な死を免れた彼を拾い上げたのは魔人族と畏怖される種族の女性で

異世界転生モノです。割と勢いで書いているのでご都合主義万歳要素を含む事があります。時間潰しにでもお使いください。

1話 「輪廻」

突然だけど、死亡フラグってあるだろ？

代表的な物を上げると「ここは俺に任せて先に行け！ 後で必ず追いつく！」とか、「俺、この戦が終わったら結婚するんだ……」とかの事だよ。他にも色々類型はあるだろうけど、得てして似たような台詞だよな。

でもさ、俺思っんだ。

一番可哀想なのって死亡フラグすら立てられないまま突如として死ぬ奴だよな。

いつものようにベッドに入り、明日も楽しい日になるといいなあ、なんて楽観的な考えを巡らせながら目を閉じた所まではなんとなく覚えていたんだ

次に目が覚めたら鬼のような形相をした鎧甲冑の男に斬り掛かられてました。

「この世から消えてなくなれ！ バケモノめ！」

凄まじい気迫です。でも正直訳が解らないのであんまり怖くありません。とても不思議です。眼の前の鎧甲冑のお方の剣がもう肩にめり込んでいてそろそろ心臓まで達しそうです。他人事みたいに「ああ、俺ここで死ぬんだな」とか考えながら、どうせなら盛大に果ててやるうなどという意味不明な衝動が湧きおこってきたのでとり

あえず叫びました。

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

と。

お次に目が覚めた時にはなにやら目の前に青白い光線が迫っていました。

「お前さえいなければ！ 消えてなくなれ！ 化物！」

ちよつと遠くに息も絶え絶えに叫ぶ軽装の男が見えました。そろそろ眼の前の光線が身体に衝突しそうです。さっきも言った通り訳が解らないのであんまり恐怖はありません。「ああ、俺ここで死ぬんだな」と他人事のように

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

とりあえず叫びました。

お次に目が覚めた時にはなにやら目の前に拳が迫っていました。

「お前は私が倒す！！塵となれ！ ば」

「ふっざけんなああああああああああ！！ゴフウ！！」

台詞を変えてみたけど駄目でした。めり込んでます、拳。もうそ

りやあ痛いです。たぶん腹部を突き抜けてます。まだ前の二つは良かった：一度目は心臓両断で即死、二度目は訳も解らないまま光に覆われて即死、でもこの三度目は頂けない。かなり痛い。

徐々に痛みが消えてきて妙に頭が澄んできた。いい加減腹が立つてきた。立つ腹がすっぽり拳大に抜け落ちてるんですけどね、現状。嗚呼、勝手に瞼が下りてきたよ。

次目覚めた時にはまた死ぬ一歩手前なのだろうか。

目が覚めました。正直何回目かも解りません。いちいち死ぬ様子を説明するのも無駄に思えてきた。

「嫌だあああああああああ！！」

とりあえず叫びました。もう半ばやけくそです。これまでに一体何回死んだと思ってるんだ。

「！！」

しかし、どうやら今回は様子が違ったようです。

え？ もう死ななくてもいいの？

ひとえにその事だけが嬉しくて、現状を何も理解出来ぬまま、溢れ出る感動に身を任せた。

「うつ、うぐつ、うえつ」

我ながら、無様な泣き姿だと思う。きつと顔は泪と鼻水でぐちゃぐちゃになっているのだろう。

「？」

ひとしきり泣いた後、自分が置かれている状況を確認しようと首をもたげた。なんかすっごい動きづらいけど今は気にしないでおう。

ふと視線を周りに巡らせると、人の顔が映った。

「、……」

異様に血色の悪い青白い肌と、不気味な赤の瞳をした何者かが、口を開いて、何か言葉を紡いでいる。漠然と何か喋っているとだけ解る。男とも女とも見分けのつかない中性的な顔。青白い肌と真っ黒で艶やかな髪が強いコントラストを発している。

丸身を帯びた身体の線や、女性特有の凹凸が見えたので、とりあえず『彼女』と代名する事にした。

全く聞きとれないが、とりあえずこちらから何かアクションを起こしてみよう。そう思って再び俺は口を開いた。

「あうあうあー？」

……ん？

落ち着け、もう一度だ。

「あぶ？ あうあー？」

……。

そこから自分の置かれた状況を知るのは早かった。

なんともなく嫌な予感がして、咄嗟に腕を振り上げて自分の顔の前に持つてくる。腕が重い。

そして、自分の手を見て理解してしまった。
その手は赤子のように小さく、弱弱しかった。握れば潰れてしま
いそうな小さな手。

意志の命令とズレた反応を示す声帯、口。

「？」

傍らでこちらを見ながら言葉を紡ぎ続けている彼女が心配そうな
表情を浮かべた。

なんとか返事をしたい所だが

「オギヤア」

気持ち悪い言葉が出ました。次こそは

「オウギヤア？」

もうしません。もっと気持ち悪くなったよ！

もう喋るものか。さっきは喋れたのに…… 最初の叫びは一度き
りの奇跡だったのか…… どうせならもっと有意義に使うべきだっ
た！ 今更遅いよね！

必死で心の中で明るく声を奮わせるが、しばしおいて、何とも言
えない虚無感に襲われた。

赤子、そう、赤子。俺の軀は赤子そのものだった。

そんなことを考えていると、ふいに体を浮遊感が襲ってきた。視
界が揺れる。

さっきまで傍らでこちらを見ていた彼女が、俺を抱き上げていた。
どこに連れて行かれるのだろうか。

でも、とりあえずは

死ななくて良いなら今はなんでもいいや。

一周して樂觀的になる。この時ばかりは自分の精神力を称えてやりたくなった。

時間がたつごとに理性は落ち着きを取り戻していく。

考える、思考する、といった力が失われていない。赤子の身体と熟成された精神の差異に戸惑うが、かくあるモノなのだからとやかく言っても仕方あるまい。深く考えて無限思考のどツボにはまるよりは幾分マシだろう。解らないものは解らない。開き直れ、俺。

彼女の腕に揺られて数十分。目に入る景色は鬱蒼とした木々ばかり。暗い。じめじめしてる。

それからさらに数十分して、ようやく視界に真新しい景色が入ってきた。

荘厳な城である。白地の壁は少し汚れていて、真っ先に古風な印象を受けた。それでも、所々で光沢のある鉱石が列を為しつつ、不思議な象形を象っていて。天から降り注ぐ光を反射して澄んだ輝きを見せているのが綺麗だった。鋭角的な構造で、例えるならまるで針の城だ。長短様々な凸型の建物が密集しているようにも見える。

城が醸し出す奇妙な雰囲気、ちよつと胸が高鳴った。

彼女が何か言ってきた。ごめんね…… 全く何言ってるか解らないよ……

でも、その優しい声色だけでもありがたい。これまでひたすらに罵倒されては殺されて、悪意をぶつけられては殺されて。そんな輪廻を巡ってきたから、もはや彼女の心配そうな表情だけで満腹です。

そんな事を考えていると、今度は抗う事すら躊躇われるレベルの眠気に襲われた。微妙に揺られるのも相まって、わずか数秒で意志とは関係なく瞼が下りてくる。

正直な所、睡眠というものが恐ろしかった。

自分の身体が赤子であることを知っているから、睡眠が必要なのだろうと納得はできるが、何分ほんの少し前までは意識が途切れては目覚め、殺され、目覚め、殺されの繰り返しだったのだ。今意識を途切れさせてしまえば、次に目覚めた時にはまた理不尽な死と直面しているのではないか。

嗚呼、でも無理、これには逆らえない。生理現象万歳。

最後の足掻きと腹を括って、意識の途切れる間際、口には出さず、心の中で呟いた。

もうどうにでもなれ

次に目が覚めた時、真っ先に周囲を確認した。
結論から言えば、俺は巨大なベッドに寝かされていた。分相応にも程がある。

でかすぎだろおい……

すると、視界の端から、ぬっ、と眠りに落ちる前に見ていた彼女の顔が現れた。

片手には分厚い本。俺が起きたことを確認すると、ぱらぱらとそれをめくり始めた。

「ア……ナタ……は、だ……れですか？」

なんと！ 知ってる言葉だ！ あの分厚い本は翻訳書か何かかな？ ……でもね、それを訊ねたところで俺に言葉を返す能力はないんだよ…… ちょっと頭の緩い人なのかな？ 馬鹿、やめろ、せつかく必死で話しかけてくれたんだぞ。

自分を戒める。とはいえ、言葉を返せないというのは紛れもない事実で、どうしようかと考えていると、再び彼女が言葉を紡いだ。

「……ごめ……んなさ……い。すこし……で……ことば……わかる、くる」

彼女が眉間に皺を寄せながら必死に手元の本に目を走らせ、再び声を発した。

片言だが、恐らく俺が理解出来る言語を使える誰かが来てくれるのだろっ、とは理解できた。運が向いてきた。これで一方通行的にはあるが情報を得られる。

嬉しくなって身体に力を漲らせ、転げまわって見せた。

彼女は俺がベッドの上を高速で転げまわる様を見て、嬉しそうに微笑んでいた。中性的な美貌に優しい微笑。血色の見られない真っ白な肌も、汚れないキャンパスのように見えて、つい見惚れてしまう。

とにかく、彼女の言う人物を待つことにしよう。それまでにある

程度身体を制御できるように努めて、言葉ではなく動きで反応を示せるように練習しよう。うん、それがいい。

彼女のいう人物はそれからほどなくして俺の視界に現れた。彼女と同じような異様に真っ白な肌と、真っ赤な眼。その人物は一見して男だと解った。控えめとはいえ、力強く隆起する筋肉群がことさらに男であることを主張してくる。

「初めまして。気分はどうだい？」

言葉づかいは丁寧だった。

俺はその短い言葉を受けて、ベッドの上で右に一回転した。フフ、これがこの短時間で俺が得た能力の一つ。右に一回転で肯定！左に一回転で否定！完璧！……なわけねえだろおおおお！これくらいしか思いつかなかったんだよ！頼む！なんとかこっちの意志を汲み取ってくれ！利発そうなお兄さん！

「うん？ ああ、君は喋れないのか。どうも赤子と関わり慣れていないから失念してしまったよ」

もう一回右に一回転。

「右に回転すると肯定……かな？」

マジパネエ。このお兄さんマジパネエ。天才と称しても良い。察しが良いとかそういう次元を軽く二秒で超えてった。よし、ここで右にもう一回転すれば完璧だ。

「はは、やっぱりそうか。解ったよ。それにしても、意志は明確なのに喋れないっていうのはもどかしいね。赤子ってみんなそうなのかな？」

いやいや、それは無いと思うよ……

「まずは自己紹介から。僕の名前は《アルフレッド・サターナ》。そして君を拾ってきた彼女は《リリアン・サターナ》、僕の妹だ。彼女の話だと、君は僕達が居住しているこの城の近くに落ちていたらしい。」

「。」「？」

アルフレッドは別の言語でリリアンと喋った。

それにしても、落ちていたとはどういう見なのか。

あともう一つ、名前で気付いた。

俺は俺の名前が解らない。

あつたような気もする。何度も何度も殺される段階で、記憶が壊れてしまったのか。思い出そうとすればするほど、記憶の空白は明確になっていった。確かに前はここではないどこかで暮らしていたはずなのに、そんな気がするのに、それすらも思い出せない。取るに足らない情報と、何度も死んだ時の状況だけが微かに残っていて。

「それで、放っておくのも忍びないからリリアンが連れて来たらしい」

名前、なんだっけなあ。

だめだ、絶対に思い出せない気がする。忘れているとか、思い出せないだけって感じじゃない。

無い。

「辛そうだけど大丈夫？　安心して。僕達は君を捨てたりしないから。連れて来たからには君が成長するのを助けよう」

ありがたい。人の良心つてのに久々に触れた気がする。

「さしあたって、とりあえずは君が僕達と十分に話せるよう、僕が言葉を教えよう。食べ物も与える。さあ、疲れただろう。君は安心して眠るといいよ」

アルフレッドが柔和な微笑みを見せた。

その微笑みにつられるように、俺は一度だけ顔をしわくちやしながら笑って。再び瞼を閉じた。

いつかのベッドの中で呟いていたように、それでも、今度ばかりは心から

明日は楽しい日になるといいなあ

2話 「殲眼」

リリアンに拾い上げられてから一週間が過ぎました。

怒涛の一週間だった…… 唯一俺が理解出来る言語を話せるアルフレッドはなにやら忙しいようで、忙しない中度々俺が寝ているベッドへ顔を出してはくれるが、大体はリリアンが俺の世話をしてくれていた。

怒涛の一週間だったと感じるのはそのリリアンのせいでもある。

「……………」

「うつ……………うえ……………えぐつ……………」

俺は今、猛烈に悲しんでいる。溢れ出る感情をせき止める事が出来ず、本気で涙している。何故かって？

「……………」

リリアンが両手に血の滴る新鮮な『生肉』を持って、俺に差し出してくるからだ。おい！ やめろ！ そんなん食えるか！ 助けてアルフレッドお兄さん！

ぬるつとした感触が口元を覆う。一向にその赤い物体を喰わない俺に対し、リリアンは無理やり喰わせようという魂胆らしい。心配してくれるのは嬉しいけどさすがにそれは食えないよ……

「……………」

その美貌で可愛らしく首を傾げて見せても俺は喰わないからな。消化に悪いだろ。ていうか一通り火を通して殺菌とかしてくれ。俺赤子だよ？ 脆弱さ半端ないよ？ やっぱリリアンってオツ

ムが緩い方なのかな……

ようやく生肉を喰わせる事を諦めてくれたようで、リリアンはいそいそとベッドの横の椅子に座り込み、自分でその生肉を食い始めた。目元に雫が浮かんでいるように見えるが気のせいかな。ちよつと泣きながら生肉頬張るとか絵的にシユールだから。

彼女はあまり感情を表に出さない女性だった。もちろん、心配しているように見えたり、軽く微笑を浮かべたりはするけど、その変化量はアルフレッドに比べるとごく微細。一週間毎日彼女の顔を近くで見ていたから解るけど、これは鉄面皮と称される類だろう。

生肉を頬張るリリアンから視線を外し、見慣れた天井を凝視するよう努める。

すると、そこで部屋の扉ががちゃりと開いた。

来たか！ 我が救世主！

「ははは、またリリアンは生肉を食べさせようとしていたのか」

笑い事じゃないですよ、アルフレッド兄さん。

「ちゃんと赤子でも食べられそうなものを持ってきたよ」

そういつてアルフレッド兄さんは手の中からいくつかの小さな木の実を取りだして見せてくれた。木の実とはいったけど、どうにもその姿は毒々しい。紫とか黒とか……

「大丈夫。ちゃんと毒は抜いてあるから」

毒？ 毒って言いました？ それ毒が入ってたってことですよね？ ……いやあ、今あんまりお腹減ってないんですよー。それはあとで食べます。後で。うん。

俺はいつも以上に必死になって左に三回転した。鬼気迫る勢いで否定の意を送る。

「そう？　じゃあ、あとでリリアンに渡しておくよ」

やめろおおおお！　それは死亡フラグだあああ！　無理やり喰わせられるに違いない。いや、確実に喰わせられる。……予言者になった気分だ。

なんて心の中で恰好よくポーズを決めていると、アルフレッドが続けて言葉を紡いだ。

「今日は僕達の家族を紹介しておこうと思ってね。きつと君の役に立つ」

家族？

ふいの言葉に疑問符を浮かべるが、すぐにアルフレッドの言葉が形となって目の前に現れた。

部屋の外からがやがやと騒がしい複数の声が聞こえてくる。そして

「！」

「！」

「、？」

うわぁ……　なんかいつぱい部屋に入ってきた。皆が皆、アルフレッドやリリアンと同じような肌の色をしていて、赤い瞳を輝かせている。

「騒がしくて悪いね。でも、皆君みたいな赤子が珍しくて一目見ようと集まってきたんだ」

そういえば、前から引つかかる単語がある。
珍しい。正確には赤子が珍しい。

「実は僕達、赤子ってほとんど見た事がないんだ。僕達の種族は繁殖力が凄く弱いから。滅多に赤子が生まれない。その代わり、すごく長命だけだね。最後に赤子が生まれたのはいつだったかなあ」

「

よしよし。知らない言葉の羅列がたくさんだぜ。

……んえ？

「だから、普通なら僕達と同じ種族の赤子がいれば誰の子だかすぐ解る筈なんだけど。一大事だからね。でも、どうにも君は僕達の誰かから生まれた訳じゃないらしい。皆知らないって」

あらまあ。それは不思議な事態ですね。

割と他人事のように心の中で頷いてしまったが、それ、俺の事だよね。

「君は僕達『^{イノ・エイラ}魔人族』と瓜二つだ。性質的にもよく似通っている。でも、君がどこから来たのかはわからない」

アルフレッドが苦笑した。

俺は今すぐに鏡を貸して貰いたい気分になった。そういえば、自分がどんな姿をしているか気にした事がなかったな。

「でもね、僕達と同じ種族なら、たとえ知らない赤子でも僕達の家族だ。誰から生まれたかはこの際たいした問題じゃない。他の家族達も、早く君と話したいって言ってるよ」

アルフレッドの横から十数人の魔人族（？）の方が興味しんしんといった体でこちらを見てくる。

俺は若干面喰らったが、アルフレッドのいうことも尤もだと思つて言語習得に意欲を燃やした。

その後、アルフレッドが他の魔人族を帰し、俺が寝ているベッドの隣に椅子を持ってきて座りこんだ。

「難しい話は君がもう少し大きくなってから話すよ。それまでは僕達を守ってあげるから、安心して育ってね」

さすがアルフレッド。その美貌と慈愛に満ちた表情でそう言われると虜にされそうだ。

そうまで言ってくれるなら、俺も安心して育って見せよう。フハハ、まずは睡眠からだ！

あつ、でも生肉は勘弁してね……

一カ月が過ぎました。意外と月日が流れるのって遅い気がする。寝ては起きて飯食ってまた寝て。時々生肉押し付けられては拒み、リリアンの顔も随分と見慣れて来た頃、ついに俺は自分の力で歩く事ができるようになっていた。

自分でもこんな速度で育つとは思わなかった。四足歩行から二足歩行へ三日で移行した時は自分の天才っぷりに心底慄いた程だ。

あと言葉の方も、アルフレッドの超翻訳機能のおかげもあって、大体習得した。第一、アルフレッド以外の魔人族は皆リリアンと同じ言葉で話していたし、俺も多大な好奇心を抱いて彼らの言葉を聞いていたので吸収は早かった。

時折足取りがおぼつかなくなる事はあれど、今やこのやけに荘厳な城の中を自由に歩けるだけの歩行技術はある。

「《サレ》、肉食べる？」

「全力で遠慮します……」

ああ、やっぱりリリアンってこんなこと言ってたんだなあ。悲しくもあり、嬉しくもある。俺の予想大的中。

サレというのは俺の名前で、魔人族の皆が考えてくれた。姓はアルフレッド、リリアンと同じサターナ。ないと不便だから、と言ってつけてくれた。

「火を通せばいいのに」

「こっちのがおいしい」

変わった趣向の持ち主だ。

ベッドから飛び降りて、部屋に設置されている姿鏡を見る。

アルフレッドの言うとおり、俺の姿は彼らと酷似していた。真っ白なアルビノ肌。鮮血のように真っ赤な瞳と、夜よりも深い黒の髪。明暗がくっきりしていてやけに色が映える。

魔人族特有の中性的な顔つきで、肌の色や眼の色、髪の色も相まってやけに超俗的に映った。

「ちょっとアルフレッドの所に行ってくるよ、リリアン」

「ん、行つてらっしゃい」

生肉を頬張るリリアンに一言声を掛け、俺は部屋の扉の取っ手に手を掛けた。

言語を覚えた所で、アルフレッドから話があるらしい。

彼の部屋はこの広大な城の上層部にある。階段を昇るのが辛い、ここは訓練だと思って頑張ろう。

俺がアルフレッドの部屋に何とか到達し、その扉を開けると、中でアルフレッドが本を読んでいた。こちらに気付いて優しくな笑みを見せてくる。

「やあ、サレ。もうここまでちゃんと歩けるようになったね」

「まだ辛いけどね」

「すごい成長速度だよ。さあ、座ってくれ」

壁一面に長大な本棚が敷き詰められている部屋。その一角にある円卓を指さして、アルフレッドが言った。

「さて、何から話したものかな……」

「俺から訊ねても良い？ その方が連鎖的に話が繋がりそうだし」

「そうだね、そうしよう」

「じゃあまず最初に」

俺は頭の中に所狭しと蓄積させていた疑問を口にしていった。

「ここはどこ？」

イーノ・エイライルドゥーエ

「魔人族の国。今は国というより集落だけだね」

「集落？」

「魔人族の数がある時を境に激減してしまったんだ。昔はもつとたくさん家族がいた。今はこの城にいる百名程がイルドゥーエの民だ。国と呼ぶには至らないかもしれない。主権も無いに等しいからね。この城　　サンクトウス城はイルドゥーエがまだ名立たる国

だったころの名残で、魔人族はここに居住している」

「激滅した理由は？」

「ウィラ・ミトス純人族の一国家に攻め入られて殺されたんだ」

心臓が浮き上がる様な感覚を、俺は感じていた。

疑問ばかりが浮かぶ。

「なんで攻め入られたの……？」

「彼らが魔人族を恐れていたからだよ。ずっと昔からね。妬みもあった。僕達魔人族はこの世界に存在する様々な種族の中でも、特に強大な『暴力』を持っていたから。魔人族は昔から人間と^{いさか}争いを起こしていたけど、ある時に平和の道を取った。最初は徹底交戦を掲げていたけどね。『先に手を出してきたのはお前等だ』って。でも、途中でその不毛さに気付いたんだよ。人族の中で最も数が多い純人族と比べると数も多くなかったし、新たな同族を生むにしても、僕達の繁殖力は絶望的なまでに弱かった。結局は数で押し切られる形になると誰もが予想していた。だから譲歩を重ねて平和の道を選んだんだ」

そう語るアルフレッドの顔は寂しげだった。

「でも、それが裏切られる形で少し前に大規模侵攻を受けたんだ。僕達は争うつつもりはないんだけどね。静かに暮らしたいという願いも叶わなかったよ」

「魔人族の生き残りは……」

「さっきも言った通り、今この城にいるだけだよ。でも、こんなことを言えば御先祖様たちに怒られてしまいそうだけど、純人族の言い分も解るんだ。僕達は傍から見ればいつ暴発するかも知れない危険物だからね」

軽く笑い声を漏らすアルフレッドの顔が俺の目に焼きつく。

「今は魔人族の数も減って、純人族もあまり手を出してこなくなつた。僕達は長命だけど、さっきも言った通り繁殖力がほとんどないから減らしてしまえばなかなか増える事はない。だから安心したんじゃないかな」

「……アルフレッドはそれで良いの？」

俺はつい、訊ねていた。

「良い、とは？」

「復讐とか、家族の仇とか、思ったりしない？」

「もう僕達にそんな力はないし……いいんだ。誰も争いを望んではないから。だからサレも気にしなくていいんだよ」

そうはいつでも、アルフレッドの語る物語を鵜呑みにはできなかった。

同時に、生への執着が希薄に見えた事が、俺の心に引っかかった。争いにくたびれてしまったのも解る。

でも俺自身は、理不尽な死を何度も経験したからこそ思うところがあった。もつと生に執着すべきだ、と。

「暗い話はこの辺にしておこう」

アルフレッドはパチンと一度拍手をして、話を切った。

「今の所、僕達はサレの成長を見ることに生きがいみたいなものを感じている。君を見ているのはとても楽しい。赤子を育てるというのは僕達も初めてで、昔の文献を読んだりしながらの不格好具合だけど」

「ありがとう。皆には感謝してるんだ。家族として迎えてくれたこと、まだ一カ月だけど、育ててくれたことも」

「はは、そう言ってもらえると僕達も嬉しいな。大丈夫、僕達はサレが一人でも生きていけるまで、君を守るから」

やめてくれ。死亡フラグみたいじゃないか。

壊れた記憶の端っこに残る言葉を使つて、俺は内心で呟いた。

「そこで、早いかもしれないけど君に魔族の力の使い方を教えよう。さつきも話した通り、僕達は純人族に目の敵にされることが多いから、自分の身を守るだけの力があつたほうがいい。いずれ君にも宿る力だと思うから、早めに伝えておきたいんだ」

アルフレッドがそう言いながら立ち上がった。どうやら場所を変えららしい。

俺はおぼつかない無い足取りでアルフレッドの後ろをついていった。

連れられたのはサンクトウス城の地下だった。

アルフレッドの本棚だらけの部屋をさらに巨大にしたような大広間があつた。

いつのまにかリリアンを含む他の魔族がそこにいて、好奇の目で俺を待っていた。

皆暇そうだなあ……

「皆仕事をほつたらかして……」

アルフレッドも俺と同じように苦笑しながら頭を掻いている。

「皆、サレのこと気になってる」

リリアンが他の魔人族の言葉を代弁していた。

「しよりの無い家族達だ。まあ、気持ちには解るから今日だけだよ」

アルフレッドが告げると、他の魔人達から「はい」と表面上だけ誠実そうな言葉が返ってくる。

「さて、今日教えるのは、魔人族特有の力についてだ。他の力の使い方は魔人族じゃなくても教えられるけど、これだけは僕達しか教えてあげられない。だから、真っ先にこの力の使い方を教えよう」

ふとアルフレッドが屈んで顔をこちらに向けてくる。

「他の種族にはない特異な力だよ。純人族に恐れられる最たる要因の一つでもある」

随分と前置きが長いが、それだけ重要な力なのだろう。体力が少ないためか、少しだけ身体がだるくなってきたけれども、アルフレッドがいつにもまして真面目な顔で言うくらいだから　と気を引き締めることにした。

一度大きく息を吸って、深呼吸をする。

「よし、大丈夫。教えて、アルフレッド」

俺の言葉にアルフレッドが大きく頷いた。

すると　アルフレッドが自分の眼元を手で覆い、少したってから手をどけてこちらを見た。

何をしたのか。

その変化はすぐに把握できた。

アルフレッドの真つ赤な瞳の中に、複雑な象形が浮き上がっていた。知らない文字のようなものが描かれているが、その主体となっているのは
六芒星の図形。

正直に心境を吐露すれば、不気味だった。
血の様な色の瞳だけがやけに輝いていて

「『グラム・イストーラ殲眼』という」

周りを見れば、他の魔人族も全く同じ象形をその真つ赤な瞳に宿していた。勿論、あのリリアンも。心臓が止まるかと思う程の壮観だった。

「説明が飛ぶけど、この世界には『魔術』という意志に準ずる力がある。意志によって事象や変化を生み出す力だ。でも、この殲眼はグラム・イストーラそれとは全く異なった性質を持つ。魔術は大抵何かを『生み出す』ことで現象とする。それが事象であつたり、変化であつたりの違いはあれど。でも　この殲眼は『何も生み出さない』」

なんとなくアルフレッドの言わんとする事が解った。

「この殲眼は全てを壊す。グラム・イストーラ……口で言うより、見た方が理解しやすいかな」

半ば茫然としている中、アルフレッドが視線を逸らし、小さく言葉を発していた。

「砕ける」

短く、儚い言葉だった。

次に、耳をつんざく破裂音が俺の背後で鳴った。

振り向けば、アルフレッドが視線を向けていた大広間の床が大きく抉れていた。大理石で出来ていると小話に聞いていたその床は粉々に炸裂し、俺の身体がすっぽりと入ってしまいそうな大きさの半球状にぽっかりと抉られていた。

いやいやいや、ちょっと、やり過ぎじゃありません？

未知の力に好奇心を覚える最中、同時に、恐怖も抱いていた。アルフレッドが言うように、その力が仮に俺にもあるとして。

もしそれが勝手に発動したら。

背筋に悪寒が走った。

「焦点を合わせるだけで良い。あとは俗に言う『悪意』や『害意』を込めれば　　こうなる」

えぐれた床面を手でなぞりながらアルフレッドが言う。

「勿論、この穢眼にはリスクもあるよ。説明しづらいけど、抽象的な言葉に置き換えれば身体の活力が減って行く。反動と称するべきかな。多用すれば立つことすらままなくなるだろう」

破格の効力に比べれば安い代償だと思う。

「そしてもう一つ。絶対に忘れてはならない『兆候』がある。いい

かい、これだけは忘れちゃいけない」

アルフレッドが続けて紡いだ。俺は大きく息を飲んで言葉を待つ。

グラム・イストラ

「殲眼を多用するといずれ『血の涙』が出る。それは殲眼の限界を表す身体反応だ。血の涙が出たらそれ以上は絶対に殲眼を使つてはいけない」

「使い続けると？」

「死ぬ」

全然安くなかった。

「血の涙が止まらなくなるんだ。ほどなくして失血死するだろう」

こええ……

「血の涙が眼から溢れた時点で発動をやめ、しばらく眼を休ませれば血の涙は止まる。だから、止まるまでは絶対に殲眼を使っちゃいけない。これは魔人族が覚えておかねばならない制約の一つだ。それと、殲眼には二次的なリスクもある」

「二次的？」

「そう。魔人族が恐れられる最たる理由がこの殲眼にあると言っただろう？ だから、魔人族を知る敵対者は大抵真つ先にこの眼を潰しに来る」

生々しい話になってきた。

グラム・イストラ

純人族と何度も争ってきたと言うのだから当然なのかな。確かに殲眼の効率的な使い道として真つ先に思いつくのは兵器としての活用だし。まだ『争い』という単語にいまいちピンと来ないけど。

聞かされたリスクのおっかなさも相まって、実は結構震えてまし

た。

「だから、もしサレが純人族の領分に身を置く時は、極力この力を使ってはいけないよ」

そりやそうだ。バレたら死に直結しかねない。

それにしても、純人族の領分に身を置くことなんてあるのか。さっきの話を反芻すればするほど、純人族が魔人族を目の敵にしていた、あるいは今でもしている、という事実が浮き彫りになっていった。あんまり考えたくない。また死ぬのは嫌だし。悪意をぶつけられるのだって楽なもんじゃない。随分と慣れたのは確かだけど、慣れて良かったと思えるものでもない。慣れれば慣れる程、別の何かが失われていくような気がして。

「今日はこのくらいにしておこうか。よくよく思えば、まだサレはほとんど赤子だからね。どうしてもこれだけは知っておいて欲しかった。魔人族として」

うん、俺も早めに教えてもらえてよかった。後々になって得体の知れないとんでも能力が暴走しました、とかじゃ笑い話にもならないからな。

俺は魔人族であるという自覚を強くして、アルフレッドの言葉に大きく頷いて見せた。

俺はこの世界について知らない事が多すぎる。今頃になって、新たな生を受けたことに気付いたような気がした。

嬉しくもあり、寂しくもなった。

第二の人生？ まさか。数えてないけど、少なくとも第十の人生くらいなのは間違いない。それに、最初の人生について明確に覚え

ているわけでもない。

過去に縋りつくのはやめた。どうせなら、前を見よう。

その方がおもしろい。

そう無理にでも思わないと、胸元辺りを襲う嫌な浮遊感になされるがまま、宙に浮いてしまいそうだった。

芽生えた思いを胸にして、俺は身体を襲う倦怠感に身を任せた。

2話 「殲眼」(後書き)

中二街道まっしぐら！

3話 「独善」

前言を撤回しよう。月日が流れるのは早かった……

アルフレッドが妙な死亡フラグ的発言をしてからなかなか安らぐ事の無かった心持だが、そんな不安をよそに時間は淡々と進み、十五年が過ぎた。

十五年。十五年だよ！？

俺の成長日記（著アルフレッド）をこそそと盗み見ながらどういった具合でここまで来たか振り返ろう。うわっ、アルフレッドって意外と字きたねえ。几帳面そうなのに……

子育て一年目。

俺、一歳。

『サレに尻尾が生えた』

……な、なんだってー！
ぐっすりと寝て、起きたら生えてたんだ。これ何言ってるか解らないと思うけどマジなんだ。さすがのアルフレッドもかなりビビってた。

真っ黒な毛が生えた尻尾。

細長いけど結構ふさふさしてる。尾の末端の毛は長くて、若干丸身を帯びてるように見える。ふさふさ、ぼふあ、って感じ。擬態語はんざーい。頭頂部まで余裕で届く長さがある。十分な長さがある上に、ぼふあってなってる先端以外は細いから結構器用なこともできたりします。

生えた当時はいきなり重心が変わったせいか、結構な頻度で転んでたなあ。

触り心地が抜群らしく、今でもリリアンの玩具にされてる。撫でられるとかなりくすぐったいのでやめてほしいです。あと握られると物凄く痛い。

『サレの尻尾はよく感情を表現している。喜んでる時や楽しい時は盛大に尻尾が振られていて、解りやすい。……僕も触りたいなあ』

アルフレッドさん、真顔で実はそんなこと考えてたんですね。というかそんなに振ってるつもりないんだけど。……どんなに隠しても尻尾のせいで内心がバレるのはいただけない。

最近、リリアンといるときは玩具にされると面倒だからよく腰に巻いて服の中に隠すようになりました。外に出しておくと手を使わずに物を持ち上げたり取ったり出来るから便利なんだけどね。

『古の魔人族には尾が生えていたというが、先祖返りでもしたのだろうか』

へー、昔の魔人族って尻尾生えてたんだ。初耳。

子育て二年目。

俺、二歳。

『サレの^{グラム・イストラ}殲眼が発現した』

忘れもしない。俺が赤子の時運び込まれた部屋がそのまま俺の部屋になったんだが、二歳にしてその部屋を全壊させた。不良少年ならぬ不良幼年と称するのが相応しいだろうか。

……冷静に顧みると、あれは危なかった。感覚とか感情とか、そ

ういう個人的で曖昧な要素に呼応しやすいものだから、発現と同時に最初は自制がうまく利かなくて乱発。血の涙が出ても止まらなかったのも、結局アルフレッドが無理やり俺の瞼を閉じて視界を閉じ、一段落した。

恐怖心が自分以外のモノに対しての忌避感に繋がったのか、それが結果的に害意に繋がったのか。遠ざけようと思ったことが逆にまづかったのかもしれない。

その後リリアンに縋りついて一日中泣いたのを覚えている。その頃にはリリアンは母のような、姉のような存在として俺の中で認知されていたといえよう。相変わらず生肉食ってるけど。

なんだろう。あの包容力は魔性だと思ってる。

子育て五年目。

俺、五歳。

グラム・イストーラ

『職眼をおおよそ使いこなせるようになったみたいだ。五歳というが、もう随分と自由に動き回れるらしい。サンクトウス城の窓ガラスはサレが割る為にあるのだと最近思うようになった。張り替えが間に合わないよ……』

その節は申し訳ありませんでした。反省しています。動きたい盛りだったのです。

子育て八年目。

俺、八歳。

『魔人族の男性陣でこの頃サレに様々な稽古をつけるようになった。皆サレが可愛いらしい。奪い合いが激しいが、今は大目に見よう。防衛力をつけるには絶好の機会とも言える』

俺の可愛さに骨抜きにされたらしい。

……嘘だ！　じゃなきゃあんな厳しい稽古しないだろ！

かれこれ随分と死を経験してきたが、魔人族の男性陣に稽古をつけられるたびに『また俺死ぬのかな……』とか思ってたんだぞ！

肋骨三本骨折、右腕尺骨骨折、左鎖骨骨折、半月板パリーンした時はさすがの男性陣も女性陣に物凄く叱られてた。

アルフレッドを見てると忘れそうになるけど、魔人族の男って結構豪気豪快な奴が多い。極端。アルフレッドみたいな紳士風のやつと、どここの歴戦の猛者だよ、みたいなやつに分かれる。でも実は前者の方が稽古は厳しかったりする。顔は笑ってるけど目が笑ってなかった。

『めきめきと成長するサレを見てみると、自分の技術を全部習得させてみたいという欲求に駆られた。ちょっとやり過ぎたかな……』

ほらみる！　アルフレッドの稽古もかなり辛かったんだぞ！　ちなみに半月板パリーンはアルフレッドの仕業です。

子育て十年目。

俺、十歳。

『リリアンは相変わらずサレにべったりだ。僕が愛用している子育て白書（改訂版）によると、そろそろサレも反抗期に入る頃。窮屈じゃないだろうか』

もう慣れた。

だけどサンクトウス城の大浴場にまでついてこられるのは困る。

もう少し女であることを気にして欲しいです。ただでさえ老いを知らないぴっぴちな身体なんですから年頃の僕を氣遣ってください。……あえて言おう、素晴らしいボディであったと。他意はない。

子育て十二年目。

俺、十二歳。

『サレの身体もおよそ完成に近づいてきた。身長も伸び、傍から見ると細いけど、サレの身体はあらゆる戦闘状況に対応できるようになっているはずだ。女性陣にあんまり筋骨隆々にしないでくれと日々言われていたから、入念に訓練内容を考えて鍛えた。曰く、色んな服を着せられなくなるから、らしい。僕には良く解らないけど、女性陣を怒らせると怖いから大人しく従っておいた。ともかく、その甲斐があつたというものだ。僕にとってはあまりに昔のことだ。記憶も微かにしかないが、大体この辺りから身体の成長は止まるはずだ。こればかりは子育て白書（改訂版）も通用しない。身体の完成と同時に、魔人族の身体は当分の間その若さを保つたままになる』

男性陣の拷問という名の稽古に耐え、その後に女性陣の着せ替え人形になるというのがあの頃の生活習慣でした。女装までさせられるとは思わなかった……

御蔭さまで十二歳の頃から全く身体は歳を取りません。アルフレッドの話だと、人族の一つの基準である純人族の年齢に換算して、大体二十歳くらいらしい。魔人族の成長は早い、完成と同時に止まる。言ってしまうえば、全盛期を保ち続ける。便利な身体だけど、老いを知らないっていうのは別の苦悩の種にもなりそう。ちなみにアルフレッドはあれで二百歳を優に超えているらしい。大抵魔人族は途中で自分の歳を数えるのが面倒になるっていった。せめて百歳まで覚えていようと心に誓った。

ちなみに精神の方は昔から変わらずそこはかとなく強靱だと自負

している。俺には開き直るといふ最終手段があるのだよ。
伊達に何回も死んでない。

子育て十四年目。

俺、十四歳。

『二年前から女性陣に魔術の手ほどきを受け、大方習得したといつても良い。もう、一人でも自分の身は守れるだろう。サレを拾ってからここまで、随分時が進むのが早かった気がする。僕達は一族の数が激減してから目的を見失っていた。そんな中、サレは僕達の心を鷲掴みにした。彼は僕達の光で在り続けるだろう』

こそばゆいです。

そして 女性陣の魔術稽古も男性陣に負けず劣らず凄まじかった。俺を着せ替え人形にしてる時のあの楽しそうな『キャッキヤ、ウフフ』的な顔はどこへ行っただと心底思った。ちょっと女性不信に陥りかけた。

魔術は、体内に宿る魔力を糧に、意志に応じて事象や変化を生ぜしめる術である。

単純に言えばこれに尽きる。

第一歩が何よりも辛かった。魔術の素、燃料とも言える体内の魔力を感覚的に把握するまでが最初の壁らしい。リリアンが相変わらずの鉄面皮で『感覚を掴むまで生肉あげない』って言ったんだ。最初は生肉なんかいらないし、とか思ってたけど

リリアン独特の言語で『生肉』が『ご飯』に直変換されるのを知ったのはこの時だった。

他の女性陣も『死にかけた方が早いんじゃない？』とか言いだす始末。おい、やめろ、俺はもう何度も死にかけた。

結果として餓死寸前で感覚が鋭敏になった為、魔力の流れを掴むことができたんだが……もうやるものか。

ちなみに断食後の最初の食事は生肉でした。食えるならなんでも良かった。すごくおいしかったです。

その後、意志によって魔術を発動させる訓練も行われたが、それもまた酷い訓練だった。飴と鞭とかそんな生ぬるいものじゃなくて、生か死か。そのおかげか上達も早かったっぽいけど、肝心の俺は生きられただけで満足です。本当に彼女達は俺を守ろうとしているのだろうか、不安になった。

魔術が学と術に体系される以上、学の方も説明されたが、そっちはなんとなくしか覚えてない。大抵、午前に学の講義、午後に術の実技だったんだが、実技が怖すぎて午前中は大概震えていました。とりあえず、魔術にも色々な種類があるみたい。意志の練り込み具合や、練り込み方で効力も様々なんだって。女性陣が『外敵に殺られる前に殺る』という教育方針を絶賛支援中だったので俺はかなり直線的な攻撃魔術ばかり覚えさせられた。これ過剰防衛じゃない？　と思われる類の魔術が多いのは気にしないことにした。サンクトウス城の周りの森がちょっと吹っ飛んじゃったのも不可抗力です。あと、体内の魔力には絶対量があって、魔術を行使するたびに減って行くんだけど、体力と同じで休めば回復する。回復速度はまちまち。少なくなってきたと貧血っぽくなる。全部使いきればもれなく倒れること間違いなし。

そして今は十五歳。

俺の成長日記帳（著アルフレッド）を元の場所にしまつて、俺はサントウス城の外に出た。

この集落イルドゥーエの領地はサントウス城以外は森に覆われていて、いかにも世俗から隔離されているという印象を抱かせる。最近はこの森の中を散歩するのがささやかな趣味だ。ずっと城の中つても窮屈だからさ。良い気分転換になる。

アルフレッドたちも快く許可してくれるのが現状だ。リリアンたち女性陣はいつも心配そうに引きとめてくるけど。

「髪、伸びたなあ」

前髪は目に掛かつていて、ふとそんなことを思った。俺の髪型はおおよそ女性陣の好みだ。横髪は長くて、肩に掛かりそうな勢い。後頭部の髪はそこまで長くない。襟足長いのが嫌いだったので襟足はバツサリ切つてある。全力で女性陣に反抗してなんとか切ることを許された。でも、耳を覆い隠している横髪は切ろうと思つたら今度は女性陣に全力で止められた。

くそつ、あの時は『権利の等価交換』とかリリアンに言われて納得しちゃったけど元から俺の髪は俺の物だよ！ なんてあたかもそっちに俺の髪の権利があるような言い方をしたのか。彼女達は策士である。俺が間抜けであるか否かは置いといて。

前髪も、もしグラム・イストラ穢眼の紋様が浮かびあがつてしまつたら隠せるように、とアルフレッドたちまで加わつて切れずにいる。どこことなく女っぽいかもしれないけど、まあ、基の顔が顔だしそこまで不自然ではないだろう。たぶんだけど。

左腰に剣、腰の背中側に採集用の小型ナイフを佩いて、尻尾を盛大に振りながら森を闊歩する。

散歩するついでに食料調達って寸法だった。

イルドゥーエ領内のこの森は動植物の宝庫。

何よりここまで育ててもらったからには少しでも恩返しをしたい。
鬱蒼とした森だけど、城に籠っているよりは解放的な気分になる。
鼻歌でも歌いたい気分だ。十八番はもとより、レパートリーが皆無
なんだけどね……

そんな事を考えていると

「獲物はっけーん！」

白い体毛の犬ところ。……犬？ まあいいや。体長は俺三人分くら
い。書庫の図鑑で見た犬よりでかいな……

いやでかすぎるだろ。

前足とか俺の腕三本分くらい。さすがに殴られたら痛そうだ。腕
くらい軽く持つて行かれそうな気がする。

森を散歩するようになったのは近頃の話だから、見た事のない動
物がいて楽しいなあ。

「あ、気付かれた」

大声を上げたのがまずかったようです。

向かってくるかなあ、とか思ってたら、犬ところは俺を見るや否
や一回だけビクリと身体を震わせて、次の瞬間には猛烈な速度で逃
げ出していました。

くそっ！ 逃げるな食料！ 野生動物の意地を見せろよ！

咄嗟に近場の大木の枝を掴んで、逆上がりっぽく勢いをつけて枝

の上に立つ。見える見える。

そのまま他の大木に飛び移りながら、徐々に犬っころとの距離を詰めた。

グラム・イストラ

殲眼を使えば目視できる時点で決着がつくけど、頼るのは良くないと思う。癖になると後々面倒だ。切り札は隠し通すべし。

「脳天直撃剣！」

我ながら酷いネーミングセンスである。ちょっと遠いけど思いつきり跳躍すればなんとか追いつけそうだったので、大きく大木の枝を蹴ってそのまま犬っころの背中にダイブ。空中で左腰の両刃剣を抜いて、着地と同時に真上から両手で剣を脳天に突き刺した。

「グルル ……」

こと切れるのは早かった。あつけないと言えばその通り。

どしん、と音を立てながら倒れる犬っころの背中から飛び下りた。

「ごめんね、食べさせてもらっよ」

生きるためには食べなければならない。経験上、生死に敏感だからこそ、生き物を殺し、食べることに忌避感はなかった。死生観については五回目あたりの死亡時までなんとなく考えてはいたけど、結局はつきりした答えは出せていない。いいんだ、それでも悟ったから。

俺は！ 俺が良ければそれでいいと思っているのだよ！

偽善的と馬鹿にされようが、独善的と罵られようが一向に構わん。フハハ。

果たしてその自論がどの範囲まで通じるのか、自分でも解らない。その時にならないと解らないこともある。そうなった時に後悔したとしても、責任は自分にあるのだからまだ気が楽だ。

とりあえず血抜きだけ済ませ、今度はナイフを抜いて犬つころを解体していった。さすがに全部はもっていけねえわ。残りは他の動物が喰いに来るだろう。

「……ん？」

肉を切り取っていると、なんとなく嫌な視線を感じた。見られている、という漠然とした感覚。

その感覚が事実だと物語るように、次の瞬間には異変が俺を襲っていた。

「おっと」

背後から何かが投擲されたのを確信する。明らかに一瞬殺気を感じた。振り向き、自分の背後へ投擲されたものを目視する。一本の投擲短剣だった。投げナイフ。

殲眼を使うまでもない。俺は尻尾でそのナイフの柄を巻き込むようにキヤッチして、そのまま即座に飛んできた方向にリリースする。尻尾ふりふり。

がさつ、と繁みが揺れるが殺気の主は姿を見せなかった。

まあ、あの程度の使い手なら放っておいても問題はないだろう。それより肉が新鮮なうちに持って帰るべきだ。

「一応アルフレッドに報告しておくか……」

そう呟きながら、俺はサンクトウス城への帰路についた。

4話 「崩壊」

十六歳になりました。

少しだけ変わったことがある。

アルフレッド達が率先して自らの訓練を開始していた。物騒な事でもあるのだろうか。

「はは、何、サレを見ていたらまた鍛えたくなつてね」

若すぎだろ。

「最近森の方はどうだい？ 前にちよつと変な事があつたって言っていたけど」

「いや、あれからは何も。なんだったのかなあ」

「次会った時に確かめればいいさ」

「それもそうか……」

年齢的には凄まじいまでの開きがあるものの、アルフレッドたちは父であり、兄のようだった。リリアン達が母であり、姉のようであるのと同じく。何分複雑だから深く考える必要はないだろう。大切な家族であることは確かだ。それだけあれば良い。

「んじゃ、俺はまた森に行つてくるから」

「解ったよ。気を付けてね」

踵を返す。

アルフレッドの言葉には尻尾を振ることで応えておいた。

俺、十八歳。成人しました。

大人の仲間入りをしたらしい。全くそんな感じはしないけど。だって周りの面々は誰も老いてないし……時が進んだって感じがしなくなってきた。

サレ・サターナという名前を付けられてから十八年も経ったのか。頭では解っているつもりなんだがどうも実感が湧かない。

成人の儀は盛大に執り行われた。盛大っていつてもサンクトウス城一階の大広間に魔族の皆が集まって騒いだけだけだ。

俺以上にアルフレッドたちのほうが楽しんでた気がする……

それにしても、少しサンクトウス城が窮屈になってきた。

城はもちろんのこと、イルドゥーエ領内の森も大体歩き切ったし。かといって、イルドゥーエ領内を出るのも少し気が引ける。

だが、そんな俺の心境を見透かしたようにアルフレッドが言った。

「サレ、そろそろイルドゥーエを出てみてはどうだい？ 君に僕らが教えられることはもう何もない。もつと見分を広めた方が、生きるのが楽しくなると思うよ」

アルフレッドたちには俺の記憶の断片を話したことがある。俺が生に執着していることも、それとなく知っているのだろう。

俺はベッドに寝転がりながらアルフレッドの言葉に答えた。

「でもさ、純人族って大抵魔族を目の敵にしてるんだよね？」

「皆が皆というわけじゃない。魔族が純人族と和平を結んでいた時には僕達を快く受け入れてくれる人たちもいたよ。そういう見識

の違いも、自分の眼で見て、耳で聞いて、確かめた方が早い」
「そう言われると頷くしかないけど……」

まだ荷が重いと思ったら帰ってくればいい。

「解った。なら、行ってみるよ」

「決まりだね。実はもう旅用具は揃えてあるんだ。明日僕の部屋に受け取りに来ると良い」

「合点了解」

軽く了承の意を示して、寝がえりを打った。

次の日。

「おい……これが旅道具とかどれだけ豪奢なんだよ……」

アルフレッドの部屋に訪れると、旅用具と称して様々なものを渡された。

「えーと、これが《宝剣ジュワイユーズ》。かなり昔だけど魔人族の皇族が使ってたものだね。宝物庫にあったんだ」

渡された剣は真つ黒な鞘に収まっている。鞘の腹には金地の金属で紋様が描かれていて、ピシッと整った直線形の柄と鍔も同様に黄金色に彩られていた。

これ金だね？ 絶対金で作られてるよね？

さらに目を引くのは刀身。柄を握って剣を抜いてみると、そのあまりに贅沢な色を発する刀身が露わになった。いかん、輝きが眩しすぎて目に悪いぞ。

「これ、刀身はなにで作られてんの？」

「エシエント・クォーツ永晶石と呼ばれる輝石だね。ダイヤモンドの希少版って言ったところかな。余程のことではなければ刃が欠けたりしないから安心して振るうといいよ。ちなみに柄頭の宝玉も永晶石で出来てる」

確かに柄頭には同じような輝きを放っている宝玉がある。真球状と見紛うまでに丸い宝玉だ。

アルフレッドがいう『余程のこと』の加減を今まで数々見せられてきた俺は、その刀身が欠ける事は一生ないんじゃないかなあ、なんて思わずにはいられなかった。

それにしても眩しい。ダイヤモンドと例えていたが、まさしく、そのしつこいまでの輝き方と、光が当たる角度で様々な色合いを見せる性質はダイヤモンドそのものだった。

オブシディアン

「あと、黒曜石で造られた狩猟採集用の短剣に、リリアンが三年かけて作った旅服一式。丈夫さは折り紙つきだよ。サレのために尻尾も出し入れしやすいようになってるしね」

オーダーメイドってやつらしい。

それにしても、微妙に金系と銀系が使われているように見えるのは気のせいだろうか。

「布は宝物庫にあった色んな服から良い所を部分ごとに拝借したんだ。糸に輝石を混ぜ込んであるから余程の事じゃないと切れたりしないし」

合点了解。深く考えるのはやめよう。丈夫な服、丈夫な狩猟短剣、丈夫な剣。そのくらいに思っていた方が楽そうだ。

あー、でもこれ全部売ったらいくらになるんだろうなあ……

貨幣価値に疎い俺でもこれらの代物が高額で売れることくらい解る。いや、売らないよ？ 売らないって。たぶん。

「あとは薬とか野宿セットとか細かい備品は全部革の袋に詰め込んでおいたから。それを持ってマントを羽織れば完成さ」

アルフレッドの眼が輝いている。早く着て、と目で訴えかけられているようだ。

しょうがないからその場で渡された宝剣と短剣をそれぞれ左腰と背腰に佩き、旅服に着替え、荷物を背負った。なかなか動きやすい。どことなく優雅な雰囲気を漂わせている服だが、旅服としての機能も十分なようだ。ついさつき採寸したかのように、サイズはぴったり。おそらく魔族の皆が愛用している貴族風の服を原型に旅服としての機能を付け加えたのだろう。ひそやかに内装のベストの胸元に括りつけられている赤い輝石が綺麗だ。

そして最後に身体が膝もとまで隠れる大きな黒いマントを羽織る。マントを首元あたりでペンダントで固定し、アルフレッドに向き直った。

「いやあ、様になってるねえ。良かった良かった。そのペンダントは僕達皆からの贈り物。僕達が魔族である所以、穢眼の紋様でもある六芒星の象形が刻まれたものだ。皮肉っぽいといえばその通りだけだね。僕達が確かに家族である証拠にもなる。僕達の家紋といってもいい。ペンダントくらいならあんまり人目につかないし、ただの六芒星だから誰も特別な感情は抱かないと思う。安心するとい

ペンダントの下地は光沢のある赤で彩られていて、その上に黒い線で六芒星が描かれていた。

「さあ、準備は整った。気が変わらないうちに行きなさい、サレ」

アルフレッドが促してくる。

荷物の中身はあとで確認しよう。

「今の台詞、親っぱかったよ」

「練習したからね」

少しさびしそうな表情でアルフレッドが返してくる。

「そっか。うん、行ってくるよ。疲れたらまた戻ってくるから」

「気にせずにお行き」

アルフレッドとの別れは思った以上に呆気なかった。

「サレ、気を付けてね」

サンクトウス城の正門まで歩を進めていたら、突然背後から声を掛けられた。

リリアンが小走りにこっちに走ってきて、俺の頬に真っ白な手を添えてくる。

「ありがとう、リリアン」

相変わらず表情の変化に乏しい顔だけど、寂しそうなのはなんとなくわかった。

「俺の家はここだし、また帰ってくるよ」

「……いつてらっしゃい」

少し詰まり気味に声を出しながら、リリアンが俺の背中を押した。

「行ってきます」

やっぱり呆気ないけど、こんなものかなあ。

なんか言葉じゃなくて、行動で表される死亡フラグみたいだけど

その時の俺はアルフレッドの死亡フラグ乱立に慣れていたせいかな、その事について深く考えなかった。

「結構歩いたなあ」

イルドゥー工領内の森で一度立ち止まって感慨深げに言ってみた。鬱蒼と生い茂った繁みの奥の方に見えるのはイルドゥー工領内と領外の境界線を示す大樹。

あの大樹を跨げば、そこからは魔人族の領分ではなくなる。

本当ならもっとドキドキするものなのだろうけど、今更になつてアルフレッドやリリアンとの別れの呆気なさが頭の中で引っかかっている。

自分でもいつここへ戻ってくるか解らないのだから、一旦戻って訳でも聞いておこうかなあ。でも戻るのも面倒だなあ……

結局、大樹までゆっくりと歩を進めた。大樹に背を預けるように座り込んで、境界線を越える前に思い残しがないか確認しよう。そんなことを思っていたら

いつかのどこかで感じた『ねっとりとした視線』を感じた。

不穏だ。

視線を気取られている時点でたいした敵対者でないことは明らかなのに。どうしても他の要素と連鎖して異様に不穏な気分させられる。

「……誰だよ」

一応訊ねてみた。

返答はない。あるわけないか。

「もやもやする……」

やっぱり一旦戻ろう。

そう思っただけ俺は首をもたげてサントウス城の方角に視線を向けた。

視界のずっと奥の方で、赤い光とどす黒い煙が上がっていた。

煙……？

嫌な予感は倍増して行く。

俺はすぐに立ちあがって地面を蹴った。

まさか。こんな短時間のうちに何か起こるなんて有り得ない。誰かがたき火を燃やし過ぎたとか、きつとそんな下らないことに違いない。

やめろよ、悪い方に考えるのはやめろ。

俺は独善的でいられれば、それで良いんだ。そうすれば開き直れるし、自分の事だからたとえ不幸が振り掛かってでも納得できる。

でも

気付いた。

俺は……俺と近い者の不幸に対して耐性がない。

何度も死んだことで得たのはささやかな独善性と、生への執着心。

俺は良い。俺なら良いんだ。

思考が悪い方向へ循環し始める。

今までの、この十八年間の様々な出来事が繋がって行って、他愛

のない日常の会話までもが記憶の引き出しから取り出されていった。

大丈夫だ。アルフレッドはあんなに死亡フラグ立たせても死ななかったし。

心のどこかではそう思っていなくて。

息を切らせてサンクトウス城の正門に辿りついた時

俺は自分の眼を疑った。

火。煙。血。

倒れている家族達。知らない軽鎧の人達。

「ははは、なんだよ、どうしたんだ？」

争った形跡だけが残っている。サンクトウス城は所々削り取られていて、地面が抉られていて。倒れている者達の身体は欠損している。

いつもみたいに少し森へ行っただけじゃないか。

なんで今日なんだよ。

「はは……」

乾いた笑いが口から漏れるのを止められない。

家族達の眼は、一つ残らず繰り抜かれていた。

真っ黒な双眸がこちらを見ている。そんな気がする。

「……っ！ 誰か生きていないのか！」

やめろ、言うな。自分から彼らが死んでいると認めているものじゃないか。

「サ……レ……」

今にも途切れそうな声が目をつついた。
リリアンの声だ。俺が間違っ筈がない。

「どこ！？ リリアン！？」

周りを見渡せば、幾人もの魔族の死体が倒れている場所で、少しだけ動く彼女の姿があった。

両眼は皆と同じように繰り抜かれていて
傍には微動だにしないアルフレッドの死体があった。

「戻って……きちゃった……の？」

「大丈夫だ！ 今助けるから！」

その慰めは偽善だ。

リアンの顔は双眸から延々と流れ落ちる真っ赤な血に染まっ
いて。

「サ……レ……『行つて……らっしやい』」

ああ……

さっきと同じように俺の頬に触れた彼女の真っ白な手は、その言
葉の後に

力なく地面に落ちた。

「あ……あ……」

リアン、もう一度俺の頬に触れてよ。

お願いだから、そんな優しい顔で死なないで

「うわあああああああああああああああああ……！」

叫ぶ。

喉が枯れる。

もうどうでもよくなった。

もういい。
解らない。
もういい。
解らない。
こんな所

壊してしまおう。

「全部ッ……！！ 消えちまえええッ！！」

俺は視界に入る家族達の亡骸を見て、城を見て
全部壊れてしまえば良いと、強く願った。
眼が焼けるような感覚を得て
視覚が途切れた。

……。

ちくしょづ。

4話 「崩壊」(後書き)

超展開!!

5話 「生痕」

激情で発動させた殲眼が及ぼした影響は多大だった。

視覚が途切れ、意識も途切れ、次に目を覚ました時、俺の目の前には更地が広がっていた。サンクトウス城も、地面に横たわっていた家族たちも、見知らぬ者たちも、全てが壊れた。その地面さえも奇妙な形に挟られていて、ようやく自分が激情に任せて起こしてしまった惨状に気付いた。

「……アッハッハ」

乾いた笑い声しか上がらない。

自分が寝転がっている地面だけが無事で、その他の地面の標高は低くなってしまった。

アルフレッドやリリアン、そしてその他の魔族の遺体も全部消えていた。

「自分が何をしたか解ってんのかよ……」

乾いた笑い声の後に、自分を責めるような言葉が勝手に口から紡ぎだされる。

解ってるよ。

見ていたくないから、全部壊れてしまえば良いと願った。

「俺自身の、独善的な思いによって」

彼らは死んでいた。それでも、俺は俺のために彼らの死体を壊して

「俺は彼らを壊したんだ」

そうだ。俺が壊した。赤子の時から、ずっと育ててくれていた親同然の家族達の骸を。

俺が納得したいがために。

俺は頭のどこかがおかしいのだろうか。

でなければ、骸と言えども、彼らの軀を、そして思い出が詰まったこの城を壊そうとはしなかったはずだ。普通なら、墓でも作ろうとしたのだろうか。

違う。俺は納得できなかった。俺の視界に入った光景の全てを否定したかった。

幼稚なのかな……

まだ少し、両目が痛い。

目を手で拭ってみると、グラム・イストラ殲眼の反動で溢れ出た血の涙がこびり付いた。今もう血の涙は止まっている。

「……そうだ。それでいい。独善的であれ。自分の事だけを考えればいい」

ハハハ。

……。

そんなこと……出来る訳ないだろう。

ずっとその場で力なく寝ころんでいるのは楽だった。
考え事だけが次々に浮かんでくる。

なぜ、アルフレッドやリリアンが呆気ないほど簡単に、簡素に、
俺を旅に駆り立てたか。

そういえば、と冷静に働き始めた頭の中で言葉を紡ぐ。
アルフレッドが持たせてくれた荷物の中に、何か入ってないか。

「……やっぱりあった」

十八年も付き合っていたせいか、なんとなくそんな気がしたんだ。
ビッシリと色々なものが詰まっている荷物の中から、薄い日記帳
のようなものを見つけた。

表紙には『サレヘ』とだけ書かれている。

俺は震える指先に力を入れて、その日記帳を開いた。
書かれていた内容は衝撃的で、どこか確信的で。

俺の頭は書かれていた内容をすんなりと受け入れてしまった。

『サレヘ。この文章を読んでいる頃には森を抜けて純人族の領地
へと足を踏み入れているかな。もしかしたらもう夜になっていて宿
を取ったりしているかな』

そんな書き出しだった。

『ここには君の出生、境遇に関することが書かれている。僕達が

独自に纏めたものだ。二年前から、僕達一族は交代で純人族の領地へ潜入して、様々な情報を集めていた』

だからアルフレッドたちはいきなり訓練を始めていたのか。

『結果、君の素性が確認できた』

その一文を読んで、嫌な胸の高鳴りを覚えた。知りたい、でも、知ることでは何かを失ってしまうかもしれないと、漠然と予想してしまった。

俺は意を決して次のページに目を走らせた。

『最初に言おう。サレ、君は確かに魔人族だった。僕達と同じ種族だ』

ああ、良かった……

心底ホッとしてしまう。

『ただ、君の魂は様々な陰謀に絡められていた。縛られていたと言っても良い。君は言ったね、俺には赤子以前の記憶がある、と。その記憶は半ば壊れていて曖昧だけど、確かに何度も死んだ、殺された、と』

……。

『君の出生の秘密は　イルドゥーエの西、君が今から向かうとしている、もしくはもう到着しているかもしれない純人族の一国家《アテム王国》にあった。イルドゥーエの隣国だ。実の所、魔人族が最後に臨んだ戦がアテム王国との戦だった。最も苛烈で、最も悲しくて、最も魔人族を奪った戦だ』

俺の出生が……どういふ風に純人族と関わっているのだろうか。

『君には何度も言ったかもしれないけど、昔、魔人族はもつと多く存在していた。まだ魔人族が多く存在していた頃、イルドゥーエは皇国だった。イルドゥーエ皇帝がいて、主権を持ち、確かな国家としてこの世界に存在していた。その頃から、アテム王国を含む様々な国と戦っていた魔人族だけど、特にアテム王国は魔人族の滅亡を率先して望んでいた。理由は様々あっただろうけど、今はおいておこう』

アテム王国か。

『最も魔人族の滅亡を望んでいたアテム王国は、遙か古に《ある計画》を立てていた』

計画……？

『魔人族と何度も交戦していたからこそ、アテム王国は魔人族の強大な力を熟知していた。個人の力量差が違い過ぎることを理解していた。だから、ある時からアテム王国は』

魔人族を作ろうとした。

アテム王国に忠実で、従順な魔人族。『魔人族を滅ぼす為の魔人族』を。

『計画の第一段階は魔人族の軀を手に入れることだった。およそ千年前に、アテム王国は老いた魔人族の一人の軀を確保した。そしてさらに、数百年の膨大な時間を掛けて、骸となったその魔人族の

軀を魔術によつて若返らせることに成功した』

馬鹿な。そんな魔術が可能なものか。

『数百年を掛けて、莫大な数の魔術士の一生と、膨大な量の魔力を糧に、それを可能にしてしまった』

狂つてゐる、とだけ思った。

『魔人族の軀は若返り、器として、武器としての力を十分に取戻した。次に、アテム王国はその器に入れる魂を作ろうとした』

嫌な鼓動が聞こえる。

『その魂の元が……サレ、君だった。アテム王国は再び大規模な魔術を使い、君の魂を何処から召喚した。呼んだんだ。何処からきたのかは解らない』

あまりに狂氣的だ。

『君は違う世界からきた誰かだったのかもしれない。彼らですら、それを知らない。ただ、《そういう魔術》としか認識していなかった。莫大な数の魔術士の妄信とも言える意志の力がその魔術を現象にした。そしてアテム王国は、何処から呼んだその魂を 歴代のイルドゥーエ皇帝の中に無理矢理押し込んだ』

入れた。どうやって。

『アテム王国は、魔人族生成とはまた別に、魔人族を滅ぼす事に特化した人を育てていた』

ああ……大体予想はついた。

『魔人族を滅ぼすとまではいかないまでも、イルドゥー工皇帝と相対するくらいの力はあった。だから、その者に君の魂を持たせ、相対と同時に魔術で押し込むよう仕込んでおいた。こんなにも複雑で、大半を天運に任せるような手段が　　成立した瞬間だ』

でも、なぜ？　なぜすぐに器に魂を入れなかった？

『なぜわざわざそういう過程を経たか。少し抽象的だけど、それは彼らが呼んだ魂、あるいはそれに付随する精神自体をも、強靱にしておきたかったからだ。歴代のイルドゥー工皇帝という魔人族に魂を入れ、徐々に魔人族の体に順応させ、同時に、その軀に染み付いた戦いの記憶を引き継がせたかった。どれほど器が優れていても、相手は同じ魔人族だったから。別の箇所で既存の魔人族を上回らなければならなかった。そして彼らはその方法に確信を得ていた。軀に魂が癒着する前ならば、大した障害もなく魂を取りだせる事実証を基に知っていたんだ。実際に最初は素直に魂を器に入れたらしい。でも、その時その事に気付いて、慌ててこういう手段を計画に差し込んだのだろう。君は結局歴代皇帝の身体の記憶を引き継がなかったから、杞憂に終わったみたいけどね』

歴代イルドゥー工皇帝の体に魂を押しこみ、軀の記憶を引き継がせようとした。

経験と、恐らく攻撃に対する耐性を引き継がせようとした。

だが、彼らの目論見は失敗に終わった。その事は俺が一番知っている。それを引き継がなかった事を知っている。

ざまあみろ。

そんな言葉が脳裏を過った。

結局、俺が無駄に死の苦しみを何度も味わったという事実は揺らがなかったが、これくらいは言ってやらねば気が済まない。

『ともかく、いきなり別の精神が軀に入ってくれば、隙が出来る。対魔人族に特化したその者達はたちまちその隙を突いて君を殺しにかかった。どうせなら歴代皇帝を滅ぼしておきたいと思ったんだろうね。そして彼らはイルドゥーエ皇帝を殺した。でも軀と十分に癒着していなかった君の魂は、軀の死につられることがなかった。つられたのはイルドゥーエ皇帝個人の魂。君は死の苦しみを味わうだけで、魂が消滅することはなかった』

まるで歴代皇帝の魂が俺の身代わりになったかのような状況だな……。俺の魂が邪魔をしなければ、彼らは生き残ったのだろうか。

『引き継いだか引き継いでいないか、それを確認する術は君の意識が覚醒すること以外になかったから、彼らはその方法を取り続けた。そうして出来上がった、あるいは、壊れていった君の魂を、ついに器に入れたのが十八年前のこと』

魔人族を滅ぼす為の魔人族が完成した日。

『だが、唯一、最後の最後に、そこまで完璧だったアテム王国が予想だになかった出来事が起こった。君が器に入れられ、覚醒した瞬間、君は赤子のまま何らかの手段を講じてアテム王国から逃げ出した』

……。

俺の記憶の中にそんな出来事は無い。

『これは僕の予想だけど、歴代イルドゥーエ皇帝の魂の残滓が君の魂にほんの少し付着していたのかもしれない。覚醒した瞬間、それまで君が入れられてきた歴代イルドゥーエ皇帝の魂の残滓も同時に覚醒し、君を助ける為に器を借りて策を講じた。もちろん、これは僕の憶測、希望といてもいい。ここまで詳しく知っていながら、その最後の出来事を僕が知らないのは、そこでアテム現王にアテム王城への侵入が発覚して追われる身になったからだ。情報を得るために、あまり君には言いたくない方法をとっていたから詳しくは言えないけど、これは確かな情報だよ』

……。

『最後の出来事を詳しく知りたいなら、アテム現王に直接聞くのが一番手っ取り早い。でも、僕はそれを君に望まない。君はアテム現王に追われている。僕達の大切な家族が危険に晒されるのは本望じゃない。だから、あえて君に復讐を頼んだりもしない。でも、ここからそれを決めるのは君自身だ。君がやりたいようにやるといい最後に纏めよう』

君は 初代イルドゥーエ皇帝の軀を持ち、歴代イルドゥーエ
アルフレッド・サターナ
皇帝の魂に触れ、最後のイルドゥーエ皇帝に育てられた魔人族だ。

『もしこれを見ても、君はイルドゥーエに戻ってきてはいけない。アテム現王に見つかってしまったからには、きっとイルドゥーエはアテム王国に襲撃されているだろう。でも、僕達だってただで滅ぼ

されはしない。僕達が一番恐れているのは、君がイルドゥーエに戻ってきてアテム王国に連れ去られることだ。君は僕達の光で、生きる意味で、守るべき家族なのだから。君が歴代皇帝の遺児だからというわけではないよ。たとえ君が純人族の子どもだったとしても、サレがサレであることに違いはない。君は君だ。君こそが僕達の家
族
」

「なんだよ…… そんな大事なこと…… 今更言いやがって
」

『最後に現実的な話をしておこう。もし僕達が皆アテム王国に殺されていたら、結果的にアテム王の悲願は虚しくもおおよそ叶ったことになる。僕達がいなくなってしまうえば、魔族は君だけになるからね。アテム王が君をどうしようと思っているか、二つの予想が建てられる。一つ、君が唯一の魔族として強大な力を秘めていることに変わりはない。君を別の目的で軍事利用しようとするかもしれない。もう一つ、最後の魔族である君を異分子と認めて、抹殺しに来るかもしれない。さっきも言った通り、君がどうするかは君次第だ。君は最後の魔族として、独善的根拠に基づいてでも、好きなように行動していいんだ。君との日々はとても楽しくて、幸せだったよ。それじゃあ、気を付けて。行つてらっしゃい、サレ』

紙に涙が落ちて、斑点を描いて行く。血の涙ではなく、透明な雫が。

全ての説明を聞いて、俺は様々な疑問に答えを見出していた。

唐突に何度も死に直面した理由。

俺の精神は歴代イルドゥーエ皇帝の体に入れられ、その度に殺されたから。

尻尾が生えた理由。

俺の軀は初代イルドゥーエ皇帝という古の魔人族の軀だから。

アルフレッド達が急に訓練を始めた理由。

俺のために、アテム王城に侵入しようとしていたから。

アルフレッドやリリアンが俺を旅に出るように促した理由。

アテム現王がイルドゥーエを襲撃すると予想していたから。

皆が俺を守ろうとした理由。

俺を

【その軀はお前にくれてやる。軀の方も、お前の魂に感応して独自の変化を遂げているようだしな。それは既にお前のモノだ。体も魂も、お前本来のモノだと思って良い。私に気兼ねする必要はない。好きなように生きろ　私の息子よ】

【なんとか彼らを出し抜くことが出来ましたね。これで私達の最後の望みは全うされました。あとは貴方次第　いずれ会うその時まで、健やかに　私の息子】

【アテムとの戦いの最後の最後で俺の軀に入ってきたのはお前か。邪魔されたのは頭にきたが、それがお前の意志ではなかったんなら仕方ねえ、今回は許してやる。どうせなら当分こっちは来るなよ。今こっちに來られるとお前を殴っちまいそうだ。……まあ、元気でな　俺の息子】

【貴様は私の遺児であること、そして魔人族であることを誇りに

思うが良い。優雅に生きよ

我が息子】

軀の底から、様々な声が響いてきて

【申し訳ありません。全ての家族を守ることが、僕には出来ませんでした】

【最後のイルドゥーエ皇帝よ、お前が気に病むことではない。お前はイルドゥーエ皇帝としてできる限りを遂行した。たった一人の私達の息子を守ったのだから】

【私達も初代様と同じ心持ですよ、アルフレッド】

【有り難う御座います、初代様、歴代様】

【私たちは先に行く。さらばだ、息子よ】

軀の中から、確かに在った何かが抜けだして行く感触が湧き出て

【僕達はサレの心の中にいるよ。もうここにはいられないけど、君が覚えていてくれれば、僕達は君の中で生き続ける。でも、それに縛られなくて良いんだ。好きなように生きてくれることが、僕達の望み。元気で　僕達の息子、サレ】

「アルフレッド……！」

最後に一つだけ、何かが残っていて

【行ってらっしゃい、サレ】

「リリアン……!!」

最後に残った何かも消えて

抜けだして行く何かは涙に姿を変えて、地面に吸い込まれて行った。
なみだ

俺はそれを救い上げる事も、止める事も出来なくて。

生まれたばかりの赤子のように、無様にも泣きじゃくった。

好きなように生きる。

仄かな独善性を含んだ優しい言葉が、いつまでも心に残っていた。

5話 「生痕」(後書き)

長いプロローグのようでしたね。お付き合いくださってありがとうございます。

6話 「出逢」

「……行くか」

そして俺は一人になった。

イルドゥーエは崩壊した。正確には俺がグラム・イストラ殲滅で壊したんだが。もうここに残る意味はない。俺は『出発』することを望まれた。皆に。だから行こう。アテム王国へ。

この短い時間に色々あったけれど、俺の気分は晴れやかだった。

俺の旅の最初の目的地がアテム王国だったことは、おそらくアルフレッドの策略だろう。アルフレッド自身は俺にアテムへ行って欲しくないと言っていた。アテム現王はたぶん俺を探している。おそらく、この十八年間見つからなかったことが奇跡とまで思えてくる程に血眼で。もしくは

俺は森で二度感じた視線を思い出し、もしかしたら既に監視されているのかもしれない、という考えも抱いた。……今は置いておくか。

口と文面ではアテムへ行って欲しくないと言っていたが、アルフレッドは俺がアテムへ行くことを予想していたのだろう。

「どこまでも手回しが良いなあ」

感嘆に値するよ、アルフレッド。

そつ心の中で呟いた。

さて、アテムへ向かうにしても明確な目的もないままぶらぶらするのは避けたいところだ。宙に浮いた状態では気が抜けてアテム王に見つかってしまうかもしれない。容姿に関しては、どこか異質に見えるかもしれないけど一応純人と同等だと言う。ただ歩いているだけでは特に障害もないと踏んでいる。

もちろん、無駄に目立つ事は避けたいけどね。

ふーむ…… アテム王には会いたくないなあ。いや、会いたい気もするなあ。

俺が生まれた原因の一つとして歴代のアテム王が関わっていたことは解るから、実は一目くらい見ておきたいという気持ちもある。でも捕まると面倒だよな。実際アテム王国つてのがどんなものなのかも解らないのに。

そんな事を考えながら歩いていると、いつのまにか先程見た大樹の傍に辿りついていた。

ここから先がアテム王国とイルドゥーエの旧共同保有地らしい。あくまで形式上の。今はその辺が曖昧になっていると聞かされていた。

さらに進めば正式なアテム王国領だ。

よし、ともかく、アテム王国がどんな国なのか、純人族はどんな風に暮らしているのか。単純なことだけどアテム王国で何泊かして観察しよう。

そうすればまた別の目的が見つかるかもしれない。

そうして俺はゆっくりとその境界線上を跨いだ。

共同領地の先はまだ森で、そこからさらに歩き続けると今度は開けた平原に出た。

アテムとイルドゥーエという異質な両国の共同保有地であるためか、村落などは見当たらない。ただただ背の低い草が一面に生えているだけだ。

何もないわ……

こんなただっ広い草原を歩くのも気が引けるなあ。と思った所で、結局進むしか道はない。方角機が西を指している限り、方向感覚が狂うということはないだろう。

ちなみに方角機は荷物の中に入っていた。他にも色々と役に立ちそうなものが沢山。

ともかく、まずは街を探そう。

一旦どこかで腰を落着けたい。そう思って、俺は再び足に力を入れ、走りだした。

その後、結局俺は三日程走り続けた。

三日。三日だよ！？ 全然街なんかねえよ！ くそっ、騙された気分だ！

猛スピードで走っていたら、いつの間にアテム領の国境線を踏破してました。気付いたのは昨日のことです。

正直眠い。一刻も早く寝たい。

「ゼエ……ハア……く、くそっ……調子に乗って走り過ぎた……」

アテム領に入ってからいくつか村や町は見たが、どれも辺境の村落って感じで十分な宿泊施設はなかった。その時は『まだ走れそうだから次の街まで行ってみよう！』なんて意気揚々と飛ばしていたけど……まさか王都まで連続的に走らされるとは思わなんだ。

広すぎるんだよ！　こんなに広い領地管理しきれねえだろ！　馬鹿っ！

今更アテム王をぶん殴りたい気分になった。

今現在はアテム王国の王都ソレイユの関所。国境線ではなく、アテム王国の中心であるソレイユに関所が設けられている。まあ、あれだけ広いし国境線に関所をもつけるのも骨が折れるのだろう。

俺以外にも入都希望者はたくさんいて、適当に列に並びながら自分の順番を待っていた。

「お次の方ー」

ようやく順番が回ってきた。二つある受付の片側に呼ばれて、歩を進めた。受付をしているのは女性だった。眼鏡をかけて事務処理

に励んでいる姿はいかにも、といった感じだ。

「アテム王国王都ソレイユへはどういった御用件で？」

成る程、そういう所から会話を始めるのか。
無難な答えを意識しつつ、俺は口を開いた。

「観光です」

「観光ですね。解りました。それでは身分証の方をお出してください」

……。

しまったあああああ！ 俺身分証なんて持ってねえよおおお
おお！

もたもたしていると、受付の女の人が不思議そうな顔で小首を傾
げた。

どうする、俺。

「あ、あのですね、ちょっと待って頂けますか？」

「構いませんよ」

焦ってる感じを前面に押し出しつつ、俺は背の荷物を降ろして中
を弄った。もはや体裁など繕っていられるか。

用意周到なアルフレッドのことだ、身分証も荷物の中に入ってる
んじゃないだろうか。

あつた。はあ……良かったー。

とりあえず自分の名前が書いてあつた紙きれを取りだして、受付

の人に見せた。

「《サレ・サターナ》様ですね。所属はイルドゥーエ王国　　イ
ルドゥーエ王国？」

うわぁ！

俺は速攻で受け付けの女の人が訝しげな顔で見ていた紙きれを奪
う様に取って、必死で笑顔を取りつくるった。

「あ、あはは、間違えましたー。すいませんねー、冗談で作ったも
のでして……今本物を渡しますねー」

ふとその紙きれの裏を見ると、うすーい文字で、

『これ、僕が考えた悪戯なんだけど面白い？　騙されてくれるか
なあ。あ、ちゃんと所属を偽ってある対外用の身分証もあるから関
所とかではそっちを使ってね』

騙されたよちくしょう！　こんな危なっかしい悪戯するなよ！
馬鹿っ！

俺はもう一度荷物の中を弄って、ようやくそれらしき紙きれを見
つけた。

「所属はアテム領パラシアスですね。受理しました。どうぞご観光
をお楽しみください」

ようやく関所を通された。

大きなため息をついてふと周りを見ると、俺の背中側にあるもう

一つの受付所で俺同様もたついている人がいた。

同じ匂いがします。あれは世間知らずの匂いだ。

フルアーマーのがつちがちの鎧と、フルフェイスの兜が異様に目立つ。兜の頭頂部から鳥の羽らしきものが一本垂れ下がっていて、身動きをするごとに鎧がガツチャガツチャと鳴り響き、兜の羽がひらひらと宙を舞っていた。

頑張れ！ 俺は同志として応援しているぞ！

心の中で、同じ匂いがするその人に声援を投げ掛け、俺は正面に向き直った。

そこにはアテム王国の王都^{ソレイユ}が悠然と横たわっていた。

とにかく活気がすごい。見た事もないような食べ物売ってる露店や、道の真ん中で大衆を相手に芸を披露している道化風の人がいったり、親子連れからイチャイチャが眩しい男女まで、とにかく色々な人が道を闊歩している。辺りからは楽しそうな話し声が聞こえ、イルドゥーエに籠っていた俺にとっては新鮮な光景だった。

ゴシック様式の建物が多く建ち並んでいて、不思議な光景でもあった。なんとというか、幻想的な気分させられる。

王都の奥の方には威厳をたたえているアテム王城。でけえ。とにかくでけえ。サンクトウス城よりもでけえ。

人の数がこれだけいれば、規模としては確かに大きくなるのだろう。

アテム王城は高い塀の様な城壁で遮られているが、その城壁以上に城本体が天高く伸びている為、景観は損なわれていない。

「ほあー、すごいなあ」

素直に感嘆する。

「ほあー……でも眠い……」

同時に、間抜けな声と共に欠伸が漏れた。さすがに疲れが溜まってるしな……

王都の散策は明日にしよう。

そう思っ受付嬢に手渡された観光冊子を開いて、適当な宿を探した。

遠くまで行くのも面倒なので、近場の宿にとりあえず一泊の予定で部屋を取った。

関所でもそうだったが、宿の主人も俺を見て特に変わった反応はしなかったな。

やっぱり外見だけなら純人族と大差ないらしい。不安がなかった訳じゃないだけに、少し嬉しかった。アルフレッド曰く、『確かに魔族の容姿は超俗的だけど、純人族にも似たような容姿の人はいる。だから、傍から見たくらいじゃ魔族って確証は得られないだろう。なにぶん、純人族は数が多いからね』らしい。紙一重だと思うのは俺だけだろうか。

小さな宿の二階に上がって、鍵と同じ番号の部屋を見つけて入ろうとした所で、思わぬ人物に出会ったのはそんなことを考えている時だった。

階段の下の方からガツチャガツチャとどこかで聞いた重い金属音が聞こえる。

はて、どこかで……

部屋に入る前に少し待って、その人物を確かめるために階段の上から顔を出してみた。

ああ、あの人か。

さつき関所で同じ匂いを感じ取った全身鎧兜の人だった。ここにいるということは関所を越えられたらしい。ふむふむ、良かった良かった。

その人が階段を上がってきて、丁度視線が交差した。

フルフェイスの兜の中からほんの少しだけ瞳が見える。こうして見てみると、無骨な格好の割にそこまで背は高くない。遠くから見ると解らないけど、近くで見れば高さの違いが意外に目立った。

今の所、赤の他人であることは確かなので、俺は少しだけ会釈をして自分の部屋に入った。

こんなことを思いながら、その実、明確な繋がりは持ちたくなかった。

俺は人と関わることに少しだけ恐怖を抱いていた。独善的でいられなくなりそうだから。繋がりが消えてしまうのは怖いから。

その日は部屋に入るや否や、簡素なベッドに飛び込んで泥のように睡眠を貪った。

寝ないで三日間走り続けたんだよ？　我ながらおっかねえ体力と精神力だぜ……

次の日、目が覚めたら『大変な事』になってました。

なんか顎の下あたりにさらさらした感触がある。布団？
いや布団掛けてないし……

目を瞑りながら心の中で言う。
得体の知れない何か。ぶっちゃけると目を開けるのが怖いです。
何故かって？

よくよく俺の横にいる何かを手で触って確認していたら、それが
人型だつてことが確認されました。

これ、あれだ。絶対髪の毛。
よし、落ち着け、俺。

俺に夢遊病の兆候は見られないぞ。俺じゃない。俺からじゃない。
信じるんだ。信じればそれが真実になる！……んなわけあるか！

安っぽいつつこみを自分に向けて放つ。

いやあ、それにしてもどうしたもんよ、これ。

俺、いざという時自分を庇いきれる自信がありません。

だから落ち着けと。

一人でわざとらしく深呼吸をしていると、不意に腕の中の何か……
いや、『誰か』が身動きをした。

俺に残された時間はあまり無いようだ。

そして俺は、意を決して目を開けた。

最初に窓から差し込む朝日が映って、次に明度に慣れた目を自分の腕の中に向ける。

ごたいめー……

「ひいひい！」

その日の朝、安宿に俺の頼りない悲鳴が響いた。

「あの………すみません………起きてください………」

繋がりをもちたくないという俺の願いは、一日も経たずに崩壊した。

腕の中にいた誰か。

さらっさらの銀色の髪を長く伸ばした女の人でした。
下着姿でした。

興奮？　しないしない。すっごい美人だけどそれどころじゃない。
はは、混乱し過ぎると逆に冷静になるもんだね……

とりあえず起こそう。

起こさないことには身動きが取れない。俺の腕は彼女の枕と化している。

それにしても、見れば見るほど美人だ。

銀色の髪は一度は撫でたいと思う程にさらさらで、きめ細やかで張りのある白い肌。長いまつ毛に少しつり目気味の目尻と整った肩細長い四肢はどこか頼りなさげで、しかし、守ってやりたいという保護欲が駆り立てられそうな儚さを表しているような気がした。

体つきは細いが、ただ単に細いというよりは締まっている感じ。

いやまで、何を冷静に観察している。

「ん……」

やべえ。自分から起こしたはいいが、また焦ってきた。色々弁解の言葉が頭を過るが、どれも説得力に欠ける。というかなんで俺が弁解しなきゃいけないんだ。ここは俺の部屋だ。間違いない。部屋番も合っている。

ともかく尻尾を隠そう。

寝る時くらい楽にさせようと思って、昨日寝る前に尻尾を服の外に出しておいた。

普段外に居る時は腰にぐるぐる巻いて服の外に出ないように隠している。尻尾とか完全に普通の人じゃないもんね。

「んあ……」

と思つて尻尾を隠そうと思つたら、この人に思いつきり掴まれました。

え？ 起きてないよね？ なんで尻尾をピンポイントで掴んだの？ 寝相とかそういうレベルじゃないよね？

「いでででで！」

いきなりの事で俺は憚りも無く悲鳴を上げてしまった。尻尾を握られるとかなり痛いんだよね。というか女の癖に結構握力あるなおい！ 千切れる！ 自慢の尻尾千切れるから！

「んあ？」

お、お目覚めなすった。

助かった……のか？

尻尾に掛けられていた圧力が緩んで、俺は大きく深呼吸をしながら安堵した。

「……あ、どうも、おはようございます」

とりあえず挨拶しておいた。フハハ、礼儀は大事だ。 心の
中の高笑いにも勢いが無いのは仕方ないことだと思う。

「……ん？ ……おはようございます」

彼女が身を起こして、眠気眼を擦りながら呆けたように返してきた。うーん、早く現状を認識して欲しいような、欲しくないようなそれから視線だけを交わす時間が数分あった。髪と同じ銀色の瞳がすごく綺麗だ

「え？」

ついに彼女が現状を認識したようだった。その銀色の長髪を左右に振り回しながら、周囲に目を配っている。

「あ、あれ？ ここ私の部屋じゃないのか？」

「誠に残念ながら、仰る通りです。ここ、俺の部屋なんです」

もうちょっと気の利いた告げ方はなかったものか。俺にはこれが限界でした。

そんなことを言うと、次に彼女は自分の格好に気が付いて

みるみるうちにその顔が真っ赤っかになっていった。

胸を両手で隠す様な仕草を見せて、ベッドから飛び下りる彼女。

「す、すまない！ 申し訳ない！ ごめんなさい！ すいません！」

凄まじい速さで何回も謝られて。

彼女は小さな悲鳴を上げながら部屋を出て行った。

言わせてくれ。

何だっ たんだ 一体……

荷物の中からタオルを取りだして、水に浸してから身体を拭いた。とりあえず身支度も終わり、疲労も回復したことだし、部屋を引き払って王都ソレイユを散策しようかなあ。

朝の出来事については保留しておいた。良く解らないし、もう考えるだけ無駄な気がする。きっと夢だった。夢だったのだ。

さあ、外へ出よう。

扉の取っ手に手を掛けて回す。

部屋を出た瞬間に、視界いっぱい昨日見た鎧兜の人が映りました。

「…………え？」

俺なんか悪いことした？ もしかして朝叫び声を上げたのが悪かった？ 謝った方がいいかな…… ソレイユにきて早々に人間関係を悪化させたとあつては俺を育ててくれたアルフレッド達に悪い気

がしてきた。

「あの……とりあえず俺謝った方がいいですか？」

「い、いや！ 謝るのは私の方だ！」

フルフェイスの兜のせい、物凄く籠った声が返ってきた。
って、この声

「あれ、さっきの」

「そ、そうだ…… その……勝手に部屋に入ってしまい申し訳なかった。……私は寝てて解らないのだが、その……なんというか……『粗相』は無かっただろうか……」

最後の単語に並々ならぬ様々な意味が含まれているように感じた。
とりあえず彼女を安心させるように言っておこう。

「ありませんでしたよ。もう過ぎた事ですから気にしないでください」

ぎこちない微笑を送っていた。

完ぺきな受け答えだと自負していたのだが、彼女はフルアーマーをもじもじさせて黙り込んでしまった。絵的にはシユールだったが、どうにも笑う気にはなれません。

俺、何か間違えた？

もう限界。居た堪れなさに耐えられそうにありません。

「そ、それじゃ！」

「あっ」

短い別れの言葉を残して、俺は階段を駆け下りてそのままの勢いで宿を出た。彼女が何か言いたげだったけど、それを待っていたら俺の精神は参ってしまいそう。

あー。そういえば家族以外の女の人とまともに話したのって初めだったなあ。

なんて感慨に耽りながら俺は王都を駆け抜けた。

7話 「種族」

今現在、俺は自分がどこを走っているのか全く解らなかった。でたために王都を走り抜けてた為です。

何故かと言えば……さっきの鎧兜の人がガツチャガツチャ鎧を鳴らしながらおっかけて来るからです。

ちよつと！　なんでおっかけて来るんだよ！

追われるとなんか逃げたくなる。

中身があの人なんだって解つてても、今の彼女は鎧兜に包まれてて重厚な威圧感を醸し出しているからすごく怖いんだよね。いやホント。

こええ……

王都の住人達からの視線を存分に浴びながら、俺は全速力で住居区らしき場所の裏路地まで駆け込んだ。

「もう追つてこないよな……」

割と本気で走ったからさすがに引き離せただろう。

あーもう、王都に入ってまだ一日しか経ってないのに面倒事に巻き込まれるなんて……

住居を囲っている塀に背を預けながら、一息ついた。

少ししてから周りを見て彼女がいないことを確認する。
よし、いないな。やっと平穩が戻って

「てめえ！ 待てよ！」

近くから男の怒号が聞こえてきた。裏路地ということもあってか、人影は見えない。

ふと気付いて自分が通ってきた住居と住居の間の真っ暗な通路に視線を運ばせた。

『彼女』が数人の男に囲まれていた。

極力気配を消して、咄嗟に物陰に隠れる。

なんだか知らんが……ちょっと面白そうだ。

「人にぶつかつたとして謝罪の一つもなしってのはどういっつ見だ？

ええ、おい」

「そうか、すまない」

彼女が頭を下げた。

すると、彼女を取り囲んでいる男たちのうちの一人が、

「ああ？ 女か？」

と目を丸めながら言った。兜の下から聞こえたくぐもった声だが、確かに声は女であると誰もが思うだろう。力強いけど、さすがに音程が高い。

すると、男の顔がみるみるうちに厭らしい笑みに変わって行く。

「ならよお、その鎧脱げよ。俺のお目がねにかなえば許してやる」

「非はこちらにあるが、なぜ少々ぶつただけで貴方の命令に従わねばならないのだ」

結構気が強いな。意外だ。

「少々？ その鎧の所為で俺の肩が取れちまったんだよ。解つてんのか？ お前に選択権なんかねえんだよ」

お、すごく悪役っぽい。アルフレッドの部屋にもこんな悪役が出てくる本があつたなあ、としみじみ考えていたら、彼女が鎧を脱ぎ始めた。

鎧の中から男装チックな服装の美女の姿が現れた。長い銀色の髪はシニヨン風に纏められていて、凛々しさが感じられる。

「これでいいだろう。私は用があるんだ、これで失礼する」

彼女はそのまま踵を返したが、俺の目からは彼らがどういう行動を起こしたか丸見えだった。

下卑た笑みを浮かべて後ろから彼女に襲いかかり

「なっ、何をする！」

「気が変わったんだよ、お前は俺に治療費を払うまで俺の奴隷にしてやる」

ベタだ。

でも実際に目の前で起こっている。

彼女は男たちに羽交い絞めにされ、地面に倒されたばたと手足を必死で動かしている。

俺はどうするべきか。いや、どうしたいかで物を考えよう。

はあ……俺こういう厄介事に巻き込まれる体質なのかなあ。

どうしても嘆息が漏れてしまう。が、同じ世間知らずな感じの彼女を放っておくのも気が引けて。

「なあ、おい。男三人で女を羽交い絞めにするってのもなかなか嘆かわしい絵なんだぞ」

俺は虚しさを心に秘めながら、物陰から飛び出していた。

「あつ」

「やあ、よくここまで追ってこれたね」

彼女が驚いたような声を上げたので、適当に反応を返しておいた。

「なんだ？ てめえ。……ん？ 女か？」

「失敬な！ 俺は男だ！」

「まあいい。どうせ見られちまったんならそいつも連れて行くかなかなか質はよさそうだしな」

おいだから男！ 俺男だから！ いつまで勘違いしてやがる……もっと近くで見れば気付くはずだ。彼女は最初から気付いていたようだし。髪に隠れて解りづらいのかな。いっそのこと近くによつ

てよく顔を見せてやろうか……

「おい、お前等、そいつも捕まえておけ。顔はキズものにするなよ」

リーダー格っぽい男が二人の男に言った。

おいおい、待ってくれよ。今どうやって俺が男であるかを知らしめようか真剣に考えてるんだから！

「わ、私の事はいいから！ 逃げる！」

彼女がそんなことを言う。

「いやあ、逃げるのはもう飽きたんだよね。君に散々追い掛けられたし」

笑って返した。事実だし。

そんな中、彼女をリーダー格に任せた男二人が小走りにこちらに歩み寄ってきた。

指をばきばき慣らしながら威嚇してくる。

言わせてもらえばね…… それ無駄な仕草だから…… 俺、アルフレッドとの訓練の時にそれやってその隙を突かれて半月板パリンしたから。

とはいえ、彼に俺と同じ運命を辿らせるのもなんだか悪い気がするなあ。恥ずかしさと痛みに悶える姿はなかなか見ものだとは思うけど、経験者としては些か気が引ける。絵図を予想したら可哀想になった。

すると、二人は懐から短剣を一本ずつ取り出し、片手に持って構えてみせた。一応警戒はしているらしい。俺の左腰に括りつけられ

ている剣の鞘に気付いたのだろうか。マントで隠れて見えづらいが、注視すれば凹凸に気付かないでもない。気付くということはそれなりに場馴れしているのかな。

あちらが得物を使ってくるなら、と俺は俺でマントを翻し、剣鞘に手を掛け、柄を握って抜剣する。

宝石ばりの輝きと、造形美という言葉をそのまま形にしたかのような様相を呈した『宝剣ジュワイユーズ』。刀身は比較的長い方だ。また、柄も両手で握めるように十分な幅が取っている。素材だけ見れば随分と煌びやかで装飾的な一品だが、その実、素材を無視すればこの宝剣は意外と機能性を重視したものだろうと理解できる。長年の訓練で様々な武器を扱ったが、ここまでしつくりと来る剣はなかった。装飾に関してはきつと初代皇帝か歴代皇帝が派手好きだったのだろう。

ともかく、俺は黒地の柄を両手で握り、正眼に構えた。

「随分な代物を持つてるじゃねえか。こりゃあいい。どこぞのお嬢様か何か？」

「いやだから俺女じゃな

」

言い切る前に一本の短剣が迫って来ていた。

ほう、良い度胸だ。せっかく男だと教えてやろうと思ったのに。そうまでして俺の発言を止めるか。

よろしい、ならば……お前達にはどこぞのお嬢様にぼっこぼこにされた悪党（笑）という不名誉な地位を与えてくれよう！
フハ、フハハハ。

先に攻撃を仕掛けて来た男は俺が宝剣を持っている腕に狙いを定めて、短剣を振り抜いて来る。速度はそこまで脅威ではない。見てからでも避けられる水準だ。

俺は短剣を半身になって避けて、すぐさま宝剣を上段に振りかぶった。

そして、突きだされた短剣目がけて振り下ろす。
凄まじい風切り音を鳴らしながら、宝剣が短剣の刃を真つ二つに
切断した。まるで抵抗などなかった。

いやあ、ホントこの宝剣切れ味半端ない。

短剣の刃が宙に舞う。

大きく目を丸めて後ずさる男をよそに、俺は次の攻撃に備えた。
もう一人が男の陰から飛び出して、突貫してくる。

先程と同じようにつきだされる短剣。
前の男の二の舞にしてやった。

男二人は刃が欠けた短剣を握りしめながら、間合いをとってこちらを凝視してくる。

「もういいだろう……」

出来ればもう向かってきてほしくないな。そう思いながら言葉を紡いだ。

「……くそ、引き上げるぞ」

俺の願いが通じたのか否かはおいて、彼女を拘束していたリーダー格の男が交戦の一部始終を見た後にそう呟いた。

丸いかどうかともかく、どうにか収まったらしい。

リーダー格の男が彼女の拘束を解いて、男二人を引き連れながら走り去って行く。

取り残された俺と美人さん。

「……」

気まずい雰囲気になってしまいました。

「た、助けてくれてありがとう……」

「あ、いえいえ、どういたしまして……」

美人さんが服の汚れを掃いながら礼を言ってきた。

彼女は終始どことなく訝しげな視線を向けてきたが、俺は意識的にその視線を取り計らわなかった。

少し沈黙が痛い。

「そういえば、なんで俺の事追っかけて来たの？」

俺は宝剣を鞘にしまいながら、咄嗟に話題を提示した。

「貴方に聞きたいことがあった」

「ん？」

「名前を……聞かせてほしい」

「……それだけ？」

「先に言っておこう。私の名前は《シオニー・シムンシアル》」

まあ、名前だけなら別にいいか。

「俺の名前は《サレ・サターナ》」

「ありがとう。 サレ、と呼ばせてもらってもいいだろうか」

「構わないよ」

「私の事もシオニーと呼んでくれ」

「合点承知」

よし、彼女の目的はこれで完了した筈だ。微妙に繋がりをもってしまったのは仕方ないとして、これ以上彼女と関わると変に仲良くなってしまうそうだったので、俺は早々に別れの言葉を言おうとした。

「もう一つ聞きたいことがあるんだ、サレ」

遮られる。

「今更になって思い出したんだが…… 君、尻尾ついてなかった？」

……。

俺は人生最大の失敗を既に犯していたようだ。……うん。

「ハハハ、な、何を仰る。尻尾がついている人なんていませんヨ」

所々声が裏返ってしまった。

……。

……。

これ、どうするよ。

とりあえず逃げるべきか？

いや、逃げてもまた追いつけられるかもしれない。

「ちよつと」

なんて顎に手を置いて考えていたら、いつの間にか彼女が俺の後ろに回り込んでいて

「失礼するよ」

「え？　ちよつ、ひゃあん！」

服の中に手を突っ込まれて変な声が出ました。

「あ、やっぱり」

服の中で腰に巻いていた尻尾をがっしりと掴まれて、外に引きずり出される。

「ま、待て！　待ってくれ！　いででで！　そんなに強く握らないで！」

「あつ、す、すまない」

謝るくらいならそんな大胆な事をしないでください。

彼女が俺の尻尾を放したので、俺は感覚を確かめるようにその場で何度か尻尾を振った。

ふう、千切れてはいないらしい。この尻尾すごく便利なんだけどある意味弱点なんだよね。強く握られるとかなり痛む。

「やっぱり尻尾だよね……」

「……はい」

もう隠せない。だって掴まれたもん。しかも痛がっちゃったし。新手のアクセサリーです！　とかも無理そうだ。

「君、純人族じゃないよね？」
「……」

やべえ、質問がどんどん鋭利になっていく。俺のガラスの心が今にも割れてしまいそうだ。

「もしかして獣人族？」
「そう！　それ！」

よし！　これで勝った！　わざわざ答えを提示するとはとんだ間抜けめ！

「残念、アテム王国は純人至高主義だから純人族以外がソレイユに
いることはないよ。関所でバレて入国拒否が関の山だからね」
「なん……だと……」

謀りおつたぞこやつ！　誘導に頭から突っ込んでいった間抜けは俺の方でした。

世間知らず仲間だと思つたら意外と色々知ってるし……　心配して損した。

「まあ……　今回はこれ以上追及せずにおこつ。助けてもらったことだし。でも私はこれからアテム王国の王宮騎士団に入隊するから、君が異種族ならアテム王国の理念に従って君を密入国者として捕まえなければならぬ」

嬉々とした表情でそんなことを言うシオニー。

「だからあんな重そうな鎧つけてたの？ 逆に動きづらくない？」

聞くなら今しかないと思った。一方的に質問に答えるのも不公平だろう。

「アテム王宮騎士団に士官した時に上司にそう言われて。私もそう思うのだが上司は上司だ。聞かない訳にもいかないだろう」

苦勞してるのね。

俺の中では今更になって純人至高主義という言葉が引つかかっていた。排他的だなあ。アテム王国の国風は俺に合いそうにないと思った。

「というわけで、もう見つからないようにね。次に会った時は私は君を捕まえなければならぬから」

「肝に銘じておきます……」

「それじゃあ私は失礼するよ。おっかけ回してすまなかった」

「あ、お気を付けてー」

踵を返したシオニーに向けて、俺は手揉みをしながらそう告げておいた。

できれば次も見逃してくれないかなあ、なんて思いながら

8話 「侵入」

はて、どうしたものか。

ソレイユを観察してみた方がいいが、特に新しい発見もない。宙ぶらりのままだ。

真夜中の王都ソレイユを闊歩しながら、思案に耽った。

人々は皆樂しげな顔で王都に住んでいる。俺が予想していたアテム王国とはえらい違いだ。結局の所、魔族生成は王国の暗部で、民はそのことを知らないのだろうか。当然と言えば当然か。

「うーん……」

駄目だ、このままだとだらけてしまいそうで。イルドウィーを飛び出した方がいいが、どうにも目標が定まらない。あるいは、アルフレッドたちの仇打ちでもした方がいいのかもなあ。アルフレッド達はそれを求めなかったが、俺自身が彼らによって何度も死んだことに対しては憤りを覚えている。

……。

「よし、アテム王に会いに行くか」

少しの好奇心と、少しの憤りを手土産に一度その顔を拝みに行こう。無為にソレイユで時間を潰すよりは幾分マシだと思えてきた。

問題はどうかやってアテム王に会うか。見たところアテム王城の警備は厳重だし、忍び込むのは厳しそう。あっちが俺の事を探しているのなら、案外わざと捕まった方が早いかもれない。

でもどうせなら対等な立場で言葉を交わしたいとも思う。

捕まったら最後、みたいなのは勘弁願いたい。

飯にもアルフレッドたちを全滅させるだけの力が彼らにはあると踏んだ方がいいか。

あー、でも下手打って死にたくないなあ。

呆けた面でそんなことを考えながら、俺は結局今日の朝引き払ったばかりの宿に戻ってきてしまった。

なんだかんだで居心地が良かった。ただ、シオニーがまだこの宿に部屋をとっていると困った事態になる。

俺は恐る恐る宿の亭主にシオニーがいるかどうか聞いた。

「あの……鎧をガツチャガツチャさせてる人ってもう出て行きました？」

明確だろう。我ながら素晴らしい形容だと思う。

「ああ、あの人なら今朝がた部屋を引き払っていったよ」

割と簡単に教えてもらえた。よし、天運が俺に傾いている。これで心おきなくこの宿に泊まれそうだ。

その後、俺は昨日と同じ部屋を取って安っぽいベッドに腰を下ろした。

……。

はつきり言おう。この宿は呪われている。天運が傾いてるとか戯言でした。悪運が傾いてました。

俺がそろそろ寝ようかと思ってベッドの上に横たわったら、不意

に部屋の窓が割れた。

何を言っているか解らないだろうけど、とにかく盛大に割れた。
鋭利なガラス片が飛んできて服にぶつかっていくけど、リリアン
特製の服には傷一つ付かなかった。

え、これ何で出来てるの？

リリアンが作った不思議旅服に驚いていると、今度は窓の外から
誰かが入ってくるのを見た。

侵入者は窓から侵入すると同時に、ベッドの傍らで立ちすくんで
いた俺に向かって強烈な蹴りを繰り出してくる。

「おおっと」

その足を手で払いのけ、咄嗟に身構える。

こんな真夜中になんだよ！ お隣さんに迷惑だろ！ 少しは時間
帯考えろよ！

「お隣さんに迷惑だろ！」

頭に浮かんだいくつかの台詞のうち、重要そうなのだけ言ってみ
た。

「お前以外にこの宿に泊まっている客はいない」

「あ、さいですか……」

冷静に返された。く、悔しい。

「で、何しにきたわけ？」

少し語気を強めて問うが、

「……」

答えはない。それどころか、侵入者は再び窓に手をかけ、外に出ようとした。

逃がすものかと手を伸ばすが

「あらっ？」

振り向きざまに投げつけられた投擲ナイフが俺の腕に刺さった。

「致死性毒と神経毒の複合薬が塗られている。お前は動けなくなり、じきに死ぬだろう」

俺はそんな決め台詞を聞きながら、ベッドに倒れ込んだ。一度は言ってみた台詞だ。

侵入者が窓から外へ逃げていく。

俺はその後ろ姿を眺めながら、ほんの少し口角をつり上げていた。

ちらちら侵入者のこと見てるのバレてないかな？

バレてないな。

よし、行った行った。馬鹿めっ！

俺は徐に立ち上がって腕に刺さったナイフを引きぬいた。

痛いには痛いけど、傷口は既に塞がりかけている。これは魔族の回復力がなせるものだ。ちなみにアルフレッドは訓練中、俺にぶった切られた腕を数秒でくつつけたことがある。治療系統の魔術すら使わずに。畏怖に値する光景だった……

個人差はあるものの、俺の身体も相当回復力に優れた身体だった。さすがに心臓や脳天を一突きされれば即死するけど。

毒？ いやいや、幼い頃からアルフレッドの木の実（毒）で鍛えられてきたこの身体は伊達じゃない。あんな慈愛に満ちた表情で『毒は抜いてあるから』とか言ってたけど、実はあれ全然毒抜きされてなかった。リリアンに無理やり喰わせられて気付いた。曰く、『いやあ、こういうのって気付かない内にやっという方が楽でしょ？』。

楽じゃないから！ 辛いから！

リリアンに無理やり木の実を喰わせられる時、アルフレッドがにやにやしながら解毒薬っぽい液体を持ってたからなんとなく気付いてましたけどね。当時赤子だった俺に手段はなかった。

そのおかげで、大体の毒に耐性がついたと言えよう。魔族が元から毒に強いってわけじゃない。この毒に対する耐性は後天的なものだ。アルフレッドって子育て白書（改訂版）を愛用してた割には随分おつかない事してきたんだよね。あの微笑に何度騙されたことか！

よし、侵入者は俺が動けないと思ってるに違いない。

亭主へのお詫びとして、一泊分の宿代に色をつけて部屋の机に置き、マントを羽織りながら侵入者と同じように窓から外へ抜け出た。微かに見える侵入者の後ろ姿を追い掛ける。

尾行の始まりだ。

これはかなり主観的な感覚に頼った推論だが

たぶんあいつはアテム王の部下だ。

イルドウーエの森で背中に受けた視線もたぶんあいつだろう。似た感じがする。あくまで勘の域を出ないけど。

やっぱり俺はずっと監視されていたのかもしれない。魔人族に育てさせた方が効率が良いとか、そんなことを考えていたのだろうか。今になってそういう考えが生まれてきた。

この推論が正しければ、アテム王に対する一つの疑念が晴れる。

アテム王は俺を処分するつもりだ。

たぶん、昨日今日あたりにアルフレッド達が死んだことを告げられたに違いない。俺の方が先にソレイユについていたなら、この時間差にも領ける。三日間走り続けた甲斐があつた。なんで俺の居場所がバレたのかって疑問はあるけどこの際どうでもいい。よくよく思えばこの王都はアテム王国の心臓だ。情報網などいくらでもあるのだろう。

あの三日でさすがに追跡は引き剥がしたはずだが……暗殺者の方も丁度俺に追いついたのかな。

ともかく、それで、俺を監視させていた奴に急遽処分を命じた。森で投擲ナイフを投げたのは錬度を知る為だったのかもしれない。

それは墓穴だったな。

あれがなければ監視者が殺気を出す必要もなかったし、それによつて俺に気付かれることもなかった。あのちよつかいがなければ俺もこういう考えには至らなかつただろう。

それにしても、いくら致死性の猛毒だからって死ぬ所を確認しなきゃだめだと思う。反撃を恐れたのかもしれないが、あいつは暗殺

者としては三流と見た。殲眼が怖いのは解るけど、相対した瞬間にそれを使わなかったことに疑問を持てよ。

最後に少しだけ皮肉を込めて、それから俺は真剣に暗殺者の後ろ姿を追った。

幾許か王都を走っていると、暗殺者はついに新たな動きを見せた。きよろきよろと周りを見回して、誰もいないことを確認している。俺は家の屋根の上から遠目にそれを眺めていた。屋根から飛び出ている煙突の陰から半身だけ乗り出してその様子を観察する。

お、なんか家に入って行った。

アテム王城への抜け道か何かかな。

少し時間を置いて俺も同様にその家の前まで走った。

「鍵か……」

さすがにそう簡単には行かないよね。

壊せばいいけど、あんまり物音は立てたくない。周りには住居があるし、気付かれると面倒になりそうだ。

「仕方ない、使おう」

時間も限られている。

グラム・イストラ

結局、俺は殲眼を使うことにした。

意志を込めて殲眼を発動させ、鍵穴部分を目視し

「砕ける」

小さな声で呟く。害意に集中しやすいように口に出して、鍵穴に意志をぶつけた。

パキッ、と小さな音を立てて、鍵穴部分が真つ二つに割れる。さして大きな音ではなかったから周辺の住人に気付かれることもないだろう。

ほんの少し眼が熱くなるが、まだ余裕はある。どれくらい連続して使えば『血の涙』がでるかも自分で知っていたから、確信があった。

「後のことを考えると多用はできないか……」

争い事になれば剣術も魔術もある。だが、やはり殲眼が一番優秀であることに変わりはない。どういう事態になるか見当もつかないから、俺は極力殲眼を使わないよう心がけることにした。

家の扉を開けると、中には何もなく、ただ床だけが広がっていた。よく見れば床の一部に奇妙な線が入っている。

解りやすいな……

少し警戒心を強めて、その線に添って床を引っぺがした。

床の下にあったのは真つ暗な通路だった。王城への抜け道という予想もあながち間違いではなさそうだ。

半ば勢いでここまできたが、ここからはもっと集中して行こう。敵陣に突っ込むようなものなのだから。

俺は意を決して通路の中に身を滑り込ませた。

大当たりらしい。

暗い通路をずっと進んでいくと、天井から微かに光が漏れる場所にたどり着いた。

ほんの少しだけその天井を押し上げて、外に視線を滑らせる。

大樹のような支柱、微かに見えるシャンデリアの光。

狭い部屋のようにだけど、随分と内装は凝ってある。こんな小さな部屋にシャンデリアとか意味ないだろ……

サンクトウス城にもシャンデリアはあったけど、こんな無駄遣いはしていなかった。

一度天井を戻して、周りに気配がないか音で確かめる。

よし、行けるな。

結構ドキドキしてます。尾行ってそこはかとなく浪漫を感じる。アルフレッドの書斎のサスペンス小説を読んでいたからだろうか。もう一度天井を押し上げ、周りを目視し、俊敏な動作で通路から抜け出た。

一つだけ扉があつて、その横にぴたりと身体を貼り付ける。

恐らく扉の奥は通路だろうけど、情報が欲しい。

と考えていたら、扉の向こうからカツカツ、と床を踏む音が聞こえてきた。

あれ？ これ向かってきてるよね？

早々に窮地に陥った。

俺は可能な限り音を消して、抜け道の入り口を開けて身体を滑り

込ませる。

バレませんように。

「貴様！ 何をしている！」

「ごめんなさい！」

……あぶねえ。声に出そうだった。びっくりさせるなよ……

俺じゃないよね？ ……俺じゃないはず。

部屋の中には誰も入ってきていないし……

「も、申し訳ありません！」

女の声が聞こえた。

俺じゃなかった。杞憂だった。

それにしても意外とよく声が響いて来る。丁度良い、この会話が何か情報を引き出せないか。

「新入りか。こんな所をうるちよろしやがって。それで、どうしたんだ一体」

最初に一喝したのは野太い声だ。男と見て間違いなさそうだ。もう一方は女。どっかで聞いたことがあるような……

「修練場を探しておりました。栄えある王宮騎士団に士官できたので、今一度剣術を鍛えようと」

「修練場？ 鍛える？ 貴様は何を言っているんだ」

「……と仰られますと？」

「いいか、貴様は剣術など鍛えなくとも良い」

「それは……どういことですか」

うわあ、この二人全然話かみ合ってないよ。

「ハッハッハ！　なんだ、知らされていなかったのか！」

馬鹿め、高笑いとはこうやるんだ。フハハハ！

……俺、こんな暗い抜け道で一人で何やってるんだろう。

「詳しく教えて頂きたい」

よく解らんが陰悪になってきたな。語気も強くなってきた。そんな事はいいから早く有用な情報よこしてくれよ。

「貴様は騎士ではなく　遠距離遊撃隊の慰安婦として士官が認められたんだよ！」

おおう……重い。いきなり重い。心の準備が……

「そ……そんな……。私は確かに騎士として士官を……」
「騙されたんだよ、貴様は。騙された方が悪いんだぞ？　第一、騎士だからという理由だけで、ともに動けないような重鎧を着させられるなんておかしいとは思わなかったのか？　すでにその時点からお前は遊ばれていたんだよ。本当に重鎧を着てきた時はあまりの滑稽さに笑いを堪え切れなかったなあ」

まあ、騙される方にも油断があったのかもしれないが、一つ言わせてくれ。

騙すほうが悪いに決まってる！

いかん！ アルフレッドのにやけ面が脳裏に浮かんできた！

「……アテム王国の王宮騎士団は高潔だと聞いておりました。それすらも……偽りなのですね」

「対外的には高潔だ。この国は王からして内部に膿を溜め込む性質なんだよ。その上、隠すのが得意ときてる。外面など、ただの一面に過ぎん」

「……」

「文句があるなら言ってみろ。取り計らうかは俺の機嫌次第だけだな。 なんなら慰安婦の演習に俺が付き合ってやろうか？」

「な、何を ！」

おー、稀に見る屑っぷり。修羅場勃発。でもいい加減にここから出たいです。早くしろよ、後ろが詰まってるんだよ。

そんなことを思っていたら、不意にガチャリ、と扉が開く音がして、次に俺が潜んでいる場所の丁度真上あたりで衝撃が起きた。かなりビックリした。

たぶん女が俺の上あたりに押し倒されたんだろう。

おいやめろ、下に人がいるんだぞ！

「抵抗するのか？ 下手な行動をすればお前はすぐに追放されるぞ？」

「くっ！ 私は ！」

上でドタバタしてる。

どうしようかと悩んでいたら、不意に別の音が俺の耳に入ってきた。

あ、今通路の奥の方から人の声が聞こえた。

もしかして俺の死体を確認しに行った別の暗殺者とか？
……。

挟まれました。

やっぱり勢いで来るんじゃないかな……

8話 「侵入」(後書き)

コメカルさとシリアスさが中途半端に混ざった感があります。うーむ、難しい。後々改訂が入るかもしれません。ちなみに次話はシリアスパートです。

9話 「意志」

集中しろ。

通路の奥から二人。上に二人。

上の二人は言い争っているから、この場合は上の方が奇襲を掛けやすいか。

既に俺の頭は奇襲する、という事を確定事項として認識していた。隠れる場所もない。可能な限り迅速に、意識を絶ってしまうことが俺にとっての安全に繋がる。ここまで来てしまったからには言い訳もできない。

通路の奥から聞こえる話し声が徐々に大きくなっていく。まだお互いに姿は見えていない。

今の所、彼らが俺に直接的な害を加えたわけじゃないから、命までは絶ちたくない。死を知っているから、というのも言い訳がましいな……

俺は単に人の死を背負いたくないだけかもしれない。

甘いのだろうか。

暗殺者にえらそうなことを言っておいて

いや、それは後で考えよう。

今は時間が無い。

俺は一応の保険として殲眼を発現させ、いざという時にいつでも害意を込められるよう、意識を『争う』ことに集中させていく。意を決して天井を押し上げた。

しかし、上の二人はこの抜け穴の丁度真上で争っているらしく、どうにも重くて押しあがらない。

くそっ、仕方ない。音が上がってしまうがこのまま通路内に閉じ

込められるよりはマシだ。

勢いをつけて、天井を思いっきり蹴りあげた。

「な、なんだ!？」

床が外れて盛大な音を奏で、同時に、野太い声が聞こえた。

瞬間、視界に映る光景。

床ごと蹴りあげられて宙を舞う軽鎧の男と、下着姿の女。

シオニーだった。

だが、音が盛大に上がってしまった以上、もたもたしている訳には行かない。

抜け穴から身を乗り出して、床面に足をつけ、丁度その頃に地面に尻から落ちた男の方へ猛突する。

尻餅について驚愕の表情と共に俺を見ている姿はそれなりに滑稽だ。

「寝ててくれ」

その男の顎に狙いを定めて、思いっきり蹴りを放った。

「ぐっ……」

程なくして男の瞳がぐるりと上を向き、首が垂れ下がった。うま
く気絶したようだ。

「サ、サレ!？」

シオニーが先程の男と同じような表情で問いかけてくるが、答えている暇は無い。

次に、抜け穴の真上に陣取り、後ろから来るであろう二人に備える。

案の定、俺を襲った暗殺者と同じような装いの二人が姿を現した。一瞬目が合つて、向こうは咄嗟に身を引こうとする。

俺は二人の頭が引つ込む前に、片手で一人ずつその頭を掴み、穴から引つ張り出した。

まず一人、先程の男と同じように膝を下顎に叩きこむ。

その後、即座にもう一人にも膝を叩きこもうとしたが、あちらも頭を掴まれた状態から反撃してきた。懷から短剣を取りだし、左胸を狙って突き刺そうとしてくる。まだ対処のしようはあった。

抜け穴から出る時に服の中から尻尾を出しておいたのが功を奏したと言えよう。

短剣を突き出すその手の手首辺りを咄嗟に尻尾で巻き付け、あらん限りの力を込めた。

結果、短剣による突きは寸での所で止まる。

尻尾も鍛えておいて良かった……握られるのはどんなに鍛えても痛いままだったんだけどね。

「がっ……!!」

そいつにも膝蹴りを叩きこむ。声とも衝撃音ともつかない奇妙な音が鳴って、同じように気絶した。

「ふう、一段落した」

頭を掴んでいた二人を適当に投げ捨て、つい声を上げてしまう。

「どうしてここに……」

「ここ、アテム王城で間違いないよね？」

「あ、ああ。……君、その眼……確か魔族の……」

シオニーは未だ驚愕の表情のままそんなことを言ってきた。

さつきからずっと殲眼を発現させているから、たぶん俺の赤い眼には六芒星の紋様が浮かび上がっているのだろう。

「勘付いたのなら隠しても仕方ないか。そうだよ、俺、魔族なんだ」

あっけらかんと公開する。たとえ俺が言わなくてもその答えに辿りついていただろうし。

「アテム王国の理念に従って俺を捕まえる？」

どういう答えが返ってくるか確信していながら、少し意地悪な問いを投げ掛ける。

「私は既に……騎士ではない」

やっぱり。

シオニーは随分と精神的なダメージを受けているようだった。眼からは光が失せているように見えて。

俺には彼女の気持ちは解らない。アテム王国の王宮騎士団に士官できたことがどういう意味なのかも解らない。ただ、彼女が生きる事を諦めようとしているのだけは解った。大袈裟かもしれないが、アルフレッドが時折見せていた表情と似ている。何かを諦めたような、空虚な微笑。自嘲するような笑み。

嬉々として俺にアテム王国の騎士になることを語っていた彼女は

もうそこにはいなかった。

「そう。俺にはよく解らないけどさ、無責任ながら一つだけ言っておくよ。生きていればそのうち良い事もあるんじゃないかな」

綺麗事だろうか。

楽観的であると笑うだろうか。

いずれにせよ、俺はそう思っている。希望なんて大層な言葉は飾らないけど、死ぬよりかはだいぶマシだ。あれはあれで苦しいからね。それこそ空虚しか残らない。自ら動くことすらできなくなるのだから。

……というか、なんで俺はそんなことを彼女に言ったのだろうか。そんな言葉が脳裏を過り、ハツとした。

俺は自分から繋がりを求めてしまっていた。

矛盾だ。

繋がりを持つ事に恐怖を覚えていながら、なぜ自分からそんなことを言ってしまったのか。繋がりがあるといふ楽しさを知っていたからなのか。

嗚呼……やばい、混乱してきた。

「私にはもう居場所がない……だから

」

やめろ。言うな。引き下がれなくなる。立ち直るな。そのままでいろ。

我ながら勝手だと思う。酷い矛盾だ。身勝手だ。

彼女は思いのほか立ち直るのが早かった。思っていた以上に、強い女だったのかもしれない。

そして……なかなか傲慢だった。

俺の望みは彼女に届くこともなく、彼女の口は言葉を紡いでいた。

「私を君の騎士にしてくれ」

何故そうまでして『騎士』にこだわるのか。否、そんなことよりも

耳を塞ぎたくなった。

この言葉に頷けば、俺は一人ではなくなってしまう。

俺にとっては大ごとだった。

魔族の皆が死んだ時の事を思い出す。

俺がその手に持っていた繋がり、全て消えてしまった時の事を思い出す。

でも、声を掛けてしまったのは俺自身で。

だから、独善的な言葉しか出てこなかった。

「……条件がある」

「……」

「俺より先に死なないでくれ」

シオニーは一度大きく目を見開いて、しかし直ぐにコクリと頷いて見せた。

これが、俺の選んだ道なのだろうか。

頭では、排他に排他を重ねるつもりだった。全て遠ざけようと考えていた。

この新しい繋がりでまで消えてしまったら、俺は耐えられるのだろうか。

……。

開き直れ。答えはあとからついてくると、今だけは信じよう。

「じゃあ、早速騎士さんに働いて貰おうかな。俺、どうしてもアテム王に会いたいからどこにいるか教えてくれない？」

音を立ててから、まだ人は駆けつけていない。時間の問題だろうとも思う。

とりあえず、羽織っていたマントを脱いでシオニーに被せた。下着姿で走り回るのも気が引けるだろう。

「ありがとう。アテム王は王城の最上階にいると思う。私も今日の朝、一度顔を合わせたただだが　騎士になるための儀式に最上階を使ったから。謁見の間も最上階にあるし、王室もたぶん階上だろう」

成る程。早々に役に立ってくれた。

それにしても最上階か。このほかでかい城の天辺まで走らなきゃならないのか。意表をつければ案外そのままいけるかもしれない。さっきの男の力量的にも、アテム王国の騎士はそこまで武力は高くないと予想できる。その一面が、他の騎士にも当てはまる画一的なものだと願うばかりだが……　逆に、それはそれで　この程度の武力にどうしてアルフレッドたちが屈したのかと理解に苦しむことになる。

アテム王に聞けば解ることだろうか。

そんなことを考えていると、シオニーが気絶してノびている軽鎧の男の腰から剣を拝借して、すらりと抜剣していた。

「いける?」

「剣さえあれば、主^{あるじ}ほどでは無いかもしれないが、それなりに腕に自信はある」

「サレでいいよ」

「なら私もシオニーでいい」

主と騎士。到底そうは思えない会話だ。シオニーって結構頑固なのかな。まあ、この方が話しやすいからそれでいいと思う。

「よし、最上階まで一気に駆け抜けよう」

「解った」

俺が先に歩を進めて、部屋の扉に手を掛ける。
ほんの少し扉を開けて、隙間から廊下に視線を滑らせた。

いけるな。

一度シオニーの方を振り向いて、頷く。シオニーもそれに対して頷きで返してくれた。

「階段は王城の外周に沿って螺旋を描いている。だから、最初の階段さえ昇ってしまえばあとは楽だと思うよ」

「了解。それで、最初の階段はどっち?」

通路の右か左か。

「右」

「合点。んじゃ、駆けあがって見ようか」

扉をそーっと開ける。

廊下に半身を乗り出してみるが、右にも左にも人がいない。場所が場所だからかな。これだけ城が大きければ人気の少ない場所もあるだろう。

一度そこで考えを切って、俺は足に力を込めた。
ここからは走り抜けるだけだ。

階段までは意外にもすんなり到着できた。だが、階段の上の方からは人の話し声がする。ここからが正念場か。

ここに到着するまでの間に、脱出の方法に関しては色々考えていた。

手っ取り早いのは王城に魔術で横穴開けて強硬脱出。どういう状況になるか解らないからなんとも言えないけど、一応手段の一つとして算段は見積もっておこう。

「ここからだ。大丈夫？ シオニー」

「問題ないよ、サレ。これでも鍛えている方だから」

鍛えているって割には細いけど。確かに、見れば息一つ荒げていない。問題はなさそうだ。

「やばくなったら逃げる、降参する、無茶しない。とにかく死ぬな」
「とても騎士に掛ける言葉とは思えないな。いずれ話し合う必要がありそうだ」

彼女は少し笑って言った。

「理解したなら、行こう」

「ついていくよ」

俺もシオニーも一旦大きく深呼吸をして、階段を駆け上がり始めた。

案の定、というか、運が良い、というか。

階段を一つ駆けあがるとさっきまでの階とは違って人がかなりいた。王城勤務者。文官から騎士と見られる武官まで、様々だ。

だが、階段を上がるとすぐ目の前にさらに上へ続く階段が見えた。シオニーの言っていた事は正しかったらしい。

結果、皆が皆俺達の姿を見て悲鳴を上げたり茫然としたり、騎士に至っては武器に手を掛け始めたが、こちらはそれに目もくれず次の階段へと走り抜けた為、ほとんど素通りすることができた。速度を緩めなければこのまま最上階までいけそうだ。

ふと時々後ろを振り向いてシオニーがいるかどうか確認する。

その度に彼女は俺の後ろにぴったりついて、その美貌に頼もしい微笑を宿らせて、俺に返してくれた。

これなら最上階まで持ちそうだ。

こんなに城をでかくする意味があったのかどうか、アテム王に問い正してやりたい。

いくら階段を上っても最上階に辿りつかないなあ。

最初は後ろから追っかけて来た王宮騎士たちもいつの間にか見えなくなっている。

「そういえば、シオニーって魔人族が怖くないの？」

余裕ができたので、唐突に聞いてみた。

「その能力が恐ろしいということは話に聞いていたけど、私は直接害意を向けられたことがないから何とも言えないな。私の方からも聞きたい。数多くの魔人族を殺した純人族が憎くはないのか？」

考えを巡らせてみた。

「なんだろうな…… 俺は昔のことは解らないから、別に純人族が多くの魔人族を奪ったっていうことにはそこまで敏感じゃない」

けど。

俺の数少ない家族を奪った、その当事者に対しては
臆げながら、憎しみを抱いているかもしれない。『アルフレッド
が言うから』と個人の意志を抑圧していた節はある。シオニーと繋
がりを持って、一つの大きな開き直りをしたからか、少しずつ抑圧
していた意志が表に出て来た気がした。

それでも、それ以上に

「俺の恩人が言ってたんだよ。純人族の皆が皆、魔人族を憎んでい
るわけじゃないって」

「……それは確かに。和平を結んでいた頃は魔人族に好意的な純人
族もいたというからね」

「シオニーもそういう類なんじゃないの？」

「そうだな…… 種族が違うから全部敵だと、そういう大きな括り

で考えたことはない。個人である私から見れば、どうにも規模が大きすぎる」

「そう、それ。俺も同じだよ。『種』に注視するあまり、『人』で
ある前提を見ないからきりがなくなる」

どうにも屁理屈っぽいけど。結局の所、自分が納得できる答えの一つでもあった。

でも改めて問われると、アルフレッド達を殺したやつらに対して
憤りが増していった。純人族に、ではない。家族達を殺した直接的
要因になったやつら。

「そうだね。史実が過去の凄惨な戦を事実として記してしまったては
いるけど、私達は現在に生きているのであって ん？ なん
だか屁理屈っぽくなったな。まあ、過程を無視した結果論は説得力
に欠けるかもしれないけれど 」

同じ事を考えていたらしい。

種全体で見れば、俺達の考え方は独善的なかもしれない。

ちよつとした会話をこなしていると、遂に上へ向かう階段が見え
なくなった。

つまり

最上階だ。

俺は気を引き締めて最上階の大広間に視線を向けた。

大きな扉と、小さな扉が二つ。

「たぶん、左側の小さな扉が王室だと思う。儀式の間は右隣の小さ
な扉で行った。真中の大きな扉は謁見の間かな」

後ろから追ってくる騎士たちの姿はないが、わざわざここで止まる必要もない。

俺はシオニーが指し示した左側の扉の前へ、歩を進めた。

一度大きく息を吸い、ため息交じりに吐き出した。

ここに居ろよ。別の場所に居られると探すのが面倒だ。

シオニーの推論を信じるのが手っ取り早かったから、それを選んだ。他にも方法はあったかもしれないが……

彼女の推論が望んだ結末を齎してくれることを祈りつつ。

俺は扉をけ破った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2571z/>

セルフ・ライト・イデオロギー 魔人転生記

2011年12月16日19時37分発行